

菱田海鷗と大垣詩壇

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7145

菱田海鷗と大垣詩壇

徳田 武

一 絶命詩に拠る救命

慶應四年(一八六八)一月三日、旧幕府軍と、薩長を中心とする新政府軍とが、鳥羽・伏見で衝突する、鳥羽・伏見の戦が起った。

これより前、慶應三年の秋、幕府は、大阪市中を取り締るべき役割を大垣藩(岐阜県)に命じ、藩は小原鉄心の子息兵部(忠迪、二十六歳)を隊長とする一手、およそ五百人を派遣した。副隊長は鈴木木工允である。兵部の一隊は、大坂城内の搦手京橋口を固め、市中を取り締ると同時に、日々、城内においてフランス伝習隊の訓練を受けていた。

その間に時勢は急転して、十月十四日、徳川慶喜は^{つひのぶ}大政奉還し、十二月九日、朝廷は王政復古を宣言し、同十九日、広く人材を諸藩に徴して、国事に参加させるために、兵部の父小原二兵衛(鉄心、大垣藩重臣、五十一歳)を参与職に登用する事となった。鉄心が京都御所でこの命令を拝したのは、まさに鳥羽・伏見の戦が起った四年正月三日の事であった。

この時、慶喜が宣戦書を公布すると、小原兵部は鳥羽街道の先駆を命ぜられ、二日夜、九つ時(午前零時)、大阪を出発し、三日七つ時(午前四時)前、淀^{よど}に到着した。

鉄心は、この報を得て大いに驚き、同日、桐山純孝(三十五歳。後に石川県令)・菱田海鷗(三十三歳)の二人を使者として兵部の陣中に遣り、大義名分を重んじ、軽拳を戒めるよう説かせた。具体的に言えば、錦旗を掲げる官軍に対して発砲するなかれ、という説諭である。だが、戦闘が既に開かれ、砲声がとどろく中、兵部は今さら退くわけにも行かず、「成り行きを見て進退するから」と、両人を返した。

純孝と海鷗の兩人は、陸路を避けて、淀堤の千両松のあたりで小舟を雇い、川中の葭^むの内を潜行し、ようやくの事で四日に京都に戻った。父は官軍、子は賊軍、という状況に、鉄心は憂悶やる方なく、六日朝、再び海鷗に深草宝塔寺前の与惣兵衛という者を添えて、兵部のもとに遣わした。が、海鷗たちは、途中、長州藩士増野精亮に捕えられ、その伏見の陣営に連行された。増野精亮は、その時、十六歳であった。彼は伏見の某寺院にいたが、歩兵(幕府側であろう)の残党が山城国広野地方の民家に入り、資財を掠奪していると、その土地の俠漢が訴え出たので、直ちに俠漢十数名をひきいて広野に到り、その逃げる者は追わず、抗する者は捕縛し、帰途についた。たまたま海鷗が路を奈良に取り、大坂に下ろうとするのに会った。精亮は、海鷗を強いて伏見の陣営に誘おうとし、応答数回の後、相共に行くこと数歩、海鷗と与惣兵衛に迫り、帯刀を脱せしめ、ついに日没頃、伏見の陣営に連行した、という(『大垣ものがたり』昭和三十九年六月、大垣市文化財協会発行、所収、増野精亮の海鷗宛書簡、明治二十六年七月十三日付)。

四年前の元治元年(一八六四)、七月十八日、いわゆる蛤^{はまぐし}御門^{ごもん}の変の際、伏見街道稻荷神社のあたりで長州藩家老福原^{ふくはら}越^こ後の兵を大垣藩の守兵が敗った事を根に持つ長州藩は、どうして海鷗たちを赦す事があるのか、殺気立って海鷗たちを詰った。

海鷗は、捕われた後も「従容自若」、ゆったりと落ちついて、長州藩の伍長たちと議論を交わし、喧々諤々、数刻にわたって、それは続けられた。思うにそれは、徳川慶喜をも新政府の一員として、即ち公議派に加えるか否か、等々の議論だったろう。

長州藩士は激昂して、海鷗たちの首を斬る事にし、海鷗自筆の「臨危の図」に見るように、海鷗と一緒に縛せられていた者十数名を前庭に引きずり出し、刀を抜き、先を争ってその首を斬り、既に六人に及んだ。次は海鷗の番である。そこで海鷗は、北を向き、明治天皇のおわす方を拝して、詩を詠じた。「将に腹を屠らんとして自らに貽す」(「将屠腹自貽」と題する七絶である。

苦学欲酬君父恩 苦学 酬むくいと欲す 君父の恩

一灯空伴卅餘年 一灯 空しく伴ふ 卅さんじゅう餘年

従容就死是今夕 従容として 死に就くは 是れ今夕

只恨丹心未徹天 只だ恨む 丹心 未だ天に徹とほらざるを

主君や父母の恩に報いようと思って、熱心に学んできた。

このままでは三十年餘り灯火のもとに学んできた事も空しくなってしまう。

平然として死んで見せるのは、まさしく今夜だが、

ただ、残念なのは、この真心がまだ天子様に達していない事だ。

この詩を読んだ隊長石部誠中(後の岡山権令ごんれい)は、大いに感心し、海鷗を救おうと思ひ、林某と相談して、長州藩士を諭し、とうとうその斬首を止めさせた。時は正月七日の未明になっていた。

以上は、この時、長州藩の陣營に在った十七歳の少年久保誠之(明治二十六年、岐阜県警部長)が親しく目撃して、明治二十六年七月に海鷗に語った話と、また石部誠中が岡山県の権令であった時に、部下の久保誠之に語った話、更に増野精亮が明治二十六年七月に海鷗に報じた記事とを総合して知られる事である。また、この話は、中村規一著『小原鉄心伝』(明治四十三年三月、上田書房発行)「鳥羽伏見の戦と鉄心の苦衷」にも記されている。

想うに、石部誠中は、右の詩の結句に勤皇の心が込められていると認め、それで海鷗を赦す気になったのであろう。また、転句の「従容就死」が、幕末に盛んに行なわれていた文天祥の「正気歌」の句であることは、拙著『幕末維新の文人と志士たち』所収「大場秋斎」の中(一六七頁)で述べた通りである。

後日譚を述べよう。兵部のひきいる大垣藩の兵は、正月五日、鳥羽街道で官軍と戦いを交えたが、旧幕府軍が敗れたために、自身も八幡まで退いた。鉄心は五日朝にも角力荒川宗五郎に書翰を持たして兵部の陣中に遣わし、官軍に発砲せぬよう戒めたが、これは間に合わなかった。藩が発砲して賊軍となった事を知った鉄心は、正月九日朝、桐山純孝と菱田海鷗を伴って京都を出発し、十日暁、大垣に到着した。この日、大垣の前々藩主戸田氏正うじただ(隠居して左門と称す)の邸宅では、藩主や重臣が列席して会議が開かれたが、鉄心は熱弁をふるって藩論を勤皇に決定させた。また、正月十二日夜、兵部のひきいる敗兵が戻って来るのを、垂井駅で待ち受け、その武器を一切取り上げて寺院に蟄居させ、一兩日中に大垣の各寺院に移して、禁錮させた、という(『小原鉄心伝』「大垣藩の反正勤王次第」)。また海鷗は、この折の功によって禄百石を賞賜された、という(大野鉄之助「菱田海鷗略伝」『海鷗遺稿』(昭和三年四月、安藤又三郎発行)所収)。そして、右の一件によって、海鷗の名は一躍高くなり、その絶命の詩は、人々に暗誦されるようになった。

右の海鷗の武勇譚が急速に他国の人にまで拡がってゆく例を見てみよう。依田学海は、佐倉藩の江戸邸留守居役を勤めて、諸藩の人間と広く交っていたが、この年の一月二十九日、大垣藩の喜多村寛司から次のような話を聞いた。即ち、大垣の士、伏見の戦に敵に擒にせらる。同擒の者三人、皆会津藩なり。敵、その罪をせむ。三人答へず、目を怒らして相視る。敵、之を斬る。某大垣人、自殺せんことを請ふ。敵、奇として之を免す。

〔『学海日録』第二卷一九四頁〕

というものである。この某大垣人が海鷗であり、敵が長州人である事はすぐに分る。また、海鷗より先に斬殺された者が三人の会津藩士であった事は、右の記事によって初めて知られる。右の記事は、海鷗が直接に語った話を比較的忠実に伝えていようが、このような形で海鷗の武勇譚が次第に諸藩に拡まってゆくのである。

二 出生と家族

海鷗は、名は重禱^{しげよし}、字は士瑞、通称は文蔵、天保七年（一八三六）六月十四日、美濃国（岐阜県）安八郡久瀬川^{くせがわ}村に生まれた。父の清次は毅斎と号し、大垣藩主戸田氏庸^{うじゆん}の侍講であり、海鷗は第六子であった。

毅斎については弟子の後藤松陰が撰し、海鷗が書した「菱田毅斎先生碑」があり、『大垣市史』（昭和五年三月、大垣市役所発行）四八〇頁に収められている。それに基き、その他の知見を加えて、毅斎の伝と人となりの輪郭を記す。

毅斎は、名は重明、字は伯麗、毅斎はその号である。天明四年（一七八四）、大垣久瀬川に、菱田李卿の長子として生まれた。家は代々農業を営み、陶器販売を兼ねていた。幼時より好學で、李卿に請うて郷友と謀り、京都の儒者合田恒斎（皆川淇園門）を招き、滞在させて就学した。恒斎が没すると、文化二年（一八〇五）、二十二歳の時、京都に出

て皆川淇園に入門した。淇園の門人帳である『有斐齋受業門人帖』(上方藝文叢刊5『名家門人録集』)、文化二年二月十日の条には、

美濃大垣菱田 清次 重明 字伯亨 紹介 福川貞氏
二十才 執事 辻重遠
とある。

淇園の塾では刻苦勉励、あまねく経史に通じ、淇園も、人を得た事を喜んだが、にわかには李卿の病が報ぜられて、帰郷した。李卿が没すると、家督を弟単厚に譲り、塾を開いて、子弟に教授した。

文化十年(一八一三)、三十歳、閏十一月某日に頼山陽(三十四歳)が大垣に入り、毅齋を訪れた。山陽が、その直前の閏十一月二日に、大垣の江馬蘭齋(細香の父)へ出した書簡に、

貴地茶碗屋何某と申すに、小子招引被致度旨、被仰下、承知仕候。

と言う(『頼山陽全伝』上)が、この茶碗屋が毅齋の事である。そして、この訪問の際、山陽は毅齋から門人後藤松陰(十六歳)を託され、松陰は山陽に入門の礼を執った。

天保十二年(一八四二)、五十七歳、藩校致道館創設に尽力し、挙げられて助教となり、後、侍講に拔擢されて、士班に列し、双刀を佩びる事を許された。農・商の出身で士班に列するのは、異数の事である。

同十四年、五十九歳、四月、藩主戸田氏正が日光に行くのに従い、十五年、命を受けて『戸田系譜』を撰し、褒賞を受けた。

毅齋は、早く母を喪ったが、継母に孝を尽くした事は、海鷗と親交を持ち、小原鉄心の禅の師でもある鴻雪爪が、菱田毅齋翁、学は実践を貴び、業を問ふ者、閭里に絡繹たり。頼山陽の濃に遊ぶに方り、首めに翁の門を叩く。時に後藤松陰、塾長たり。翁乃ち松陰をして山陽に從学せしむ。其の己れを虚しうして以て人の美を成すこと、類

ね此くの如し。翁の継母、病みて両目を喪ふ。十数年、常に臥床に在り。翁、晨昏 歛を承け、菓を進め肩を摩し、
齡七十を超ふるも、未だ嘗て少しも懈おそらず。偶ま出でて例期に違はば、母 輒ち曰く、清次仏、帰ること何ぞ晚
きやと。其の孝、天性に出づ。清次は翁の通称なり。『山高水長図記』上。原漢文)

と保証している。もつとも、同一の孝行譚が、後述する如く弟の愨こく斎にも伝わっている。なお、右の漢文の上欄には、
海鷗と親しく交る事になる小野湖山が、

(梁川) 星巖翁、數しばしばば毅齋翁の人となりを称す。後、余、其の家に就きて一面するを得たり。時に翁 已に高齡、
今は唯だ其の風標を記すのみ。(原漢文)

という感想を寄せている。星巖は、毅齋の人徳を評価していたのである。後述するが、湖山と海鷗が大垣の桃源山全昌
寺(湖山の寓居)で初めて会ったのが、海鷗十三歳の嘉永元年(一八四八)の事であると言う(海鷗の「与湖翁唱和五
十首」自跋に「余 甫めて十三歳、湖翁に桃源山に謁す」と)。この時に湖山が毅齋にも会ったとすれば、毅齋は六十
五歳となっており、「高齡」と言うのもうなづけるのである。なお、右の毅齋兄弟の孝が藩公に聞えて、公は兄弟に登
錦を賜った、と言う。

安政四年(一八五七)二月十一日、毅齋は病を得、十三日夜、没した。享年七十四。徳円寺の先塋に葬られる。

毅齋の学は、折衷学の淇園に字びはしたが、程・朱を根本として、最も四書、『小学』『近思録』を研究し、『通鑑綱
目』を愛読した。著書に『理氣説』『勸善録』、詩文稿があった。

毅齋の性格は、無欲恬澹、学問以外には他の嗜好無く、粗末な机や筆墨に甘んじて、一生、衣食の精粗を言わず、数
十年、一着の袴をはき続け、人が笑うも晏然としていた。生徒に授けるには深切懇到、浮華に陥らず、人材を養成した。
配は松野氏で、七男一女を設けた。長男の旗、次男の貞、四男の孝は、先だって没した。三男の重光が家を嗣ぎ、藩

校の句読師となった。五男の守敬は出でて赤坂駅の竹中氏を嗣いだ。六男が海鷗で、別に家を構えた。七男の庫は、出でて同族の要助氏を嗣ぎ、女は同族の清三郎に嫁いだ。

穀斎の詩は、美濃の詩人二百名の作品一千首を取めた『三野風雅』（文政四年刊）九に四首収められている。その内の「竹軒に暑を避く某大夫の別荘」を挙げておこう。

好忘炎日苦 好く忘る 炎日の苦を

閑坐伴清吟 閑坐 清吟に伴ふ

泉激将濺席 泉 激して 将に席に濺がんとし

竹涼欲湿襟 竹 涼くして 襟を湿うるはさんとす

数枚浮水果 数枚 水に浮く果

一曲隔簾琴 一曲 簾を隔つる琴

恰有此君在 恰かも此君しゅんの在る有り

和来曼玉音 和し来る 曼玉かづまの音

ここ竹軒は、盛夏の苦しさを忘れるのに良く、

私は、静かに坐って、大夫殿の作詩のお相手をしている。

泉の流れは激しくて、坐蒲団に飛び散らんばかり。

竹林は涼しく、葉から落ちる露は襟をぬらそうとする。

数個の木の実が池に浮び、

一曲の琴の音が簾すだれのかなたから聞えてくる。

折よく、王羲之が「此の君」と呼んだ竹（『世説新語』任誕）があつて、

琴の音に合わせて、玉を打ち鳴らすような、そよぐ音をたてる。

某大夫とは、小原鉄心の事であろう。第六句の琴の奏者は、妙齡の女性の存在を暗示しており、この詩は、毅齋のとなりを反映して、清澄でありながらも、ほのかに艶あざっぽさを含んでいるのである。

海鷗の長兄の恪齋は、海鷗が十一歳の時に亡くなった。夭折の秀才で、やはり後藤松陰が撰した碑文が『大垣市史』下、四八一頁に載せられている。それに拠り、知見をも加えて、恪齋についての概略を述べる。

恪齋が没した弘化三年（一八四六）の四月、松陰が美濃に帰省し、大垣に来て、毅齋に謁すると、毅齋は、「亡兒のために碑を建てたいので、君が銘を作ってくれ」と述べた。松陰が、「それは自分の任ではありません。以前、同郷の北村孟溟の碣は山陽頼翁に乞うたが、御子息の才と学とは孟溟に十倍すると言えるほどだから、自分が銘を作るのでは、地下の霊も瞑目しないでありましょう。どうしてこれを岳父篠崎小竹翁に乞わないのですか。私が小竹翁に紹介致しましょう」と言うと、毅齋は、「その通りだが、これは亡兒の遺言なのだ。君が作ってくれ」と言った。そこで松陰は、記す。

諱は旗、字は成祥、通称は旗太郎、恪齋と号す。生まれて文才有り、尤も詩に長ず。嘗て（大）坂に來り、余が家に寓す。篠（崎）翁、一日、其の作を見て、大いに之を奇として曰く、「（美）濃、何ぞ詩才を出すことの多きや」と。既にして其の計を聞き、酸鼻して曰く、「菱田公の明を喪ふことおもんば慮るべし」と。君の病みて起たざるは、実

に弘化三年丙午三月十四夜なり矣。寿二十六。西久瀬川の徳円寺の先塋に葬る。配山中氏、一子を生む。孝太郎と曰ふ。甫めて三歳なり。君の祖を半兵衛と曰ふ。陶器を鬻ぐを業とす。而して(毅斎)先生、学を好み、家を其の弟清助に付し、帷を下して徒に授く。君既に成立して、屹として負荷に堪ふ。今此の如し、已んぬるかな、噫。銘に曰く、

先生の甄陶、能く羣才を造る。惟だ此の一器、成りて蚤に摧く。

友人美濃後藤機、浪華の橋居に撰す。

恪斎は梁川星巖に入門し、星巖の門人の詩を輯めた『玉池吟社詩』一集(弘化二年五月、凡言)卷二に、長短十首の詩が録されている。その内、「広瀬漉紙の詩」と「高田酒壺の詩并に引」は、白居易の新樂府を思わせる、下層労働者の辛苦をユーモアにくるませて詠じた七古であるが、ここには後者を挙げておこう。

北濃高田村の民家、半ばは陶窯を以て業と為す。而して多く酒壺を造る。壺の大きと斗を納る。貌陋に倂賤し。世俗 呼びて貧乏徳利と曰ふ。村中一年の造る所、百万に下らず。商戸、之を江都に鬻ぐ。余が家も亦た之を業とす。乃ち戯れに酒壺の詩を作る。

高田之山高崎嶮 高田の山 高くして崎嶮たり

中有村民数百廬 中に村民の数百廬有り

地僻人朴生計乏 地 僻に 人 朴にして 生計乏し

家家陶窯代耘鋤 家家 陶窯 耘鋤に代ふ

就中酒壺製尤殊 中に就きて 酒壺 製 尤も殊なり

規模約容一斗餘 規模 約おちむね容る 一斗餘

貌陋価賤乃便利 貌陋に 価賤く 乃ち便利なり

世人遂以德利呼 世人 遂に徳利を以て呼ぶ

一年造出百万壺 一年 造り出す 百万壺

百船般運向江都 百船 般運して 江都に向ふ

江都由來歌吹海 江都 由來 歌吹の海

人家棋布錐地無 人家 棋布して 錐地無し

上野看花鞭宝馬 上野に 花を見て 宝馬に鞭ち

墨水賞月棹蘭艫 墨水に 月を賞して 蘭艫さそぎに棹す

春花秋月遊戲場 春花 秋月 遊戲場

此物時從如僕奴 此の物 時に從ひて 僕奴の如し

人人酣醉酒亦尽 人人 酣醉して 酒も亦た尽き

一幕遊塵争帰途 一幕 遊塵 帰途を争ふ

盃盤狼藉抛不顧 盃盤 狼藉 抛なげうちて顧みず

寧問渡落空酒壺 寧ぞ問はんや 渡落たる 空酒の壺

君不見昭代經營嘗未就初 君 見ずや 昭代の經營 嘗て未だ就らざるの初

大野茫茫寒月孤 大野 茫茫として 寒月孤なり

誰計東方生大曜 誰か計らん 東方 大曜を生じ

平蕪化為万竈区 平蕪 化して万竈の区と為るを

若使今日猶平蕪 若し今日をして猶ほ平蕪ならしむれば

縦有酒壺何所須 縦ひ酒壺有るも 何の須ふる所ぞ

嗟乎可喜吾曹亦沐太平沢 嗟乎 喜ぶべし 吾が曹も亦た太平の沢に沐し

一家百口被壺糊 一家 百口 壺に糊せらるるを

高田村の山は、高くけわしい。

その山中に、村民の数百軒の家がある。

土地は辺鄙で、人は朴訥、生活のすべは乏しく、

家々は陶器を造って、農耕に代えている。

その中でも酒壺の造り方が最も特色あり、

大よそ一斗（日本の二升）あまりの酒を入れられる大ききだ。

不恰好で値段は安いが、使いやすく、

人々はそこで、徳利と呼ぶようになった。

一年に百万壺も製産し、

沢山の船で江戸に運送する。

江戸は元来、歓楽の都市で、

人家が整然と並び、立錐の餘地もない。

飾りたてた馬に鞭うっては上野に桜見物に行き、
綺麗な船を浮かべては隅田川で月をめぐる。

春の桜、秋の月と遊び戯れる所で、

この徳利は、その時々々に下僕のように伴われる。

人々が存分に酔って、酒も飲みほされると、

土埃を立てて大股に帰途を急ぐ。

杯や皿は、散りくりに投げ出されて、片付けられず、

酒が無くなってからっぽの徳利など問題にもされぬ。

あなたは見えないか、この明らかに治まれる御世が、まだ開かれていない前、

この辺りは広々とした野原で、ただ月が冷たく照らしているばかりであった。

思いきや、東国三河に大屋（徳川家康）が現れ、

荒れ野原が陶器造りの村となろうとは。

もし、今日でもまだ荒れ野原のままにさせておくならば、

たとい徳利があったとしても、用いようがないだろう。

ああ、幸いな事には、我々ごときも、太平の恩沢に浴し、

一家の大勢の者が陶器造りで食べられるのだ。

卑近な題材を自由自在に詠じ、最後は大きな経世済民の話題に結びつけるところ、凡庸な手腕ではない。殊に「一蕪」(大股歩き) などという語は、用例が今のところ元曲にしか見出せない珍しい語で、恪斎がどのような物からこの語を撰取したのか、一考を要するのだが、それはともかく、非凡な詩才の片鱗が現れているのである。

なお、郷里の詩僧である溪毛芥の『毛芥遺稿』(明治四十三年、南条文雄発行)の天保九年の所に、「戊戌二月、細香女史・菱田成祥・山田子善及び諸友と共に梅を荒尾に観る。五絶句を得たり」、年次未詳の所に「菱田成祥と共に赤坂山に登る」と題する短古がある事を言い添えておこう。

毅斎には弟がいて、本家を継いでいるが、海鷗と親交のある大垣藩儒野村藤陰が、その伝を記している。「愨斎翁墓碑銘」であり、『藤陰遺稿』(明治四十一年一月後序)三に収まる。本家の営業状態などが窺える資料であるので、その訓読文を掲げておこう。

明治六年癸酉、八月十六日、愨斎翁、病を以て没す。久瀬川の徳円寺の先塋の次に葬る。寿を得ること八十八。今茲戊寅(十一年)の秋、孫男半兵衛、来りて余に銘を嘱して曰く、王父、德行有り、而るに未だ其の墓に銘有らず。何を以てか後に表はさんや。敢て請ふと。余曰く、諾と。状を按ずるに、翁、諱は単厚、半兵衛と称す。後に名を清助と更む。菱田氏。愨斎は其の号なり。李卿君の第二子、西濃久瀬川村の人なり。家、世よ陶器を鬻ぐを業と為す。翁に至りて益す其の業を盛んにし、子麿を江戸に置く。因りて管家を東濃多治見村の燒窯家に遣し、尽く其の陶器を購ひて、以て転売し、又た近国に輸送す。是に由りて東濃の陶器、世に著はると云ふ。天保中、大垣藩主戸田公、翁を挙げて産物会所の事を管せしむ。翁、恪勤懈らず、日に糧を齎して衙に上ること、凡そ二十年許りなり。時に国用多端、歳ごとに且つ荐りに餓え、上下困乏す。翁、金を献じて藩費を助く。藩主、姓を称し及び刀を佩ぶるを許し、其の恪勤と篤志とを賞す。翁、傍ら農桑を勉む。時に村人、租を欠き、田に汚萊多ければ、翁

乃ち為に方法を設け、田を班わかち耕を課し、躬親ちんづから率先し、之を久しうして積欠終に消え、汚萊も亦た良田と為る。藩主、其の功を嘉よみし、特に養子半蔵を擢めんでて里正と為す。

翁、幼くして母を喪ひ、継母に事へて至孝なり。継母、年老いて明を喪ひ、病みて蓐に在ること殆ど十年なり。翁、看護すること一日の如く、未だ嘗て倦容有らず。藩主、之を褒め、物を賜ひて旌表す。翁、人となり淳朴、他の嗜好無し。夙に読書を好み、贅を合田恒斎に執る。暇あれば則ち書を披く。儒老莊仏及び百家の書、涉獵せざる莫し。尤も経書を喜び、躬行実践を期す。老いて益す健、日夜読書し、手より巻を釈おかず。嗚乎、世の学者、名を釣り利を弋とり、儒名有れども儒行無き者、滔々として皆是なり。之をして翁の実践すること此くの如きを聞かしめば、豈赧然たること無からんや。

配安田氏、二男二女を生む。長は鶴三郎、次鈴四郎は殤す。女、一は若山恕庵に適き、一は加納右内に適く。鶴三郎は先って没し、孫尚ほ幼し。乃ち支族半蔵を養ひ、以て嗣と為す。而るに半蔵も亦た早世す。孫則ち後を承く。半兵衛、即ち是なり。銘に曰く、

孝なるかな惟れ孝、百行の本。農に于おてし商に于おてし、雷びん々勉々たり。家業 日に熾んに、村通済辨す。読書は己れが為にし、躬行実践す。凡百の善行、孝の推演する所なり。

右に拠つて、菱田本家が垣藩御用達ともいうべき富家であり、弟愨齋も兄毅齋と師を同じくし、同様に義母に孝であった事が知られるのである。ただし、義母に孝であり、好学であったという条は、毅齋のそれが錯入された可能性がある。海鷗の兄弟に就いて言を加えれば、その「夜雨、感有り」という詩の題に注が付されていて、「予に兄弟七人有り。

六人皆早世す。近く又た一人を喪ふ」とあり、兄一人が明治期まで在世した事が知られる。また、その詩の湖山評には、「僕、尊大人を識り、又た尊兄二人を識る」とあり、湖山は二人の兄には面識があったのである。それは長兄愨齋と三

兄重光の事であつたらう。

海鷗は、前記の如き家に生まれ、右の如き父のもとで育つたのである。

三 黎^{れい}祁^い吟社加盟

海鷗は早熟で、年少の時から詩を好んだようである。大垣では、弘化(一八四四〜四八)の初めから、小原鉄心らが同志を糾合して詩社を結び、黎祁吟社と名づけ、毎月一回、順廻りに各社員の家にて、詩酒唱酬した。黎祁は、宋の陸游の「盤を拭ひて連展(麦餌)を堆くし、鬪(釜)を洗つて黎祁を煮る」(「鄰曲」『劍南詩稿』五十六)という詩句から採つたもので、蜀人が豆腐をいう語である。この事は、伊藤信著『細香と紅蘭』(昭和四十四年、矢橋龍吉発行)二〇五頁以下に述べられているのであるが、それに拠れば、同人の詩を収載した『黎祁吟社集』は第三集まで纏められたらしく、その内、第一集は所在不明であるが、第二・三集は岐阜市の元軍医中將の家保存されている、との事である。そして、第二集は、弘化四年十月より嘉永二年(一八四九)六月に至る一年九ヶ月間に成つた社員詩が輯録されており、第三集には嘉永二年八月より同四年三月に至る一年七ヶ月間に成つた詩が収録されている由である。中んづく、第三集には、弘化五年、即ち嘉永元年(一八四八)の加盟人員の姓名録が載っている由であるが、それを年齢順に挙げると、水野陸沈(六十六歳)・江馬細香(六十二歳)・松倉瓦鷄・宇野南村(三十八歳)・温井梅窓・小原鉄心(三十二歳)・鳥井研山・江馬筭莊・野村藤陰(二十二歳)・松倉蘭馨・菱田海鷗(十三歳)、となると言つ。

鉄心が「城中の詩客芥よりも夥し」(「城中詩客夥於芥」)「咬菜社五友歌」『鉄心遺稿』一)と言うように、大垣は詩作人口が多かつた所であるが、そうした中に在って、僅か十三歳の海鷗が江馬細香や小原鉄心のように詩家として聞え

た人々とともに同人になつてゐる点に、海鷗の早熟ぶりと詩愛好癖とが看取できるのである。同時に、この頃より早くも鉄心に目をかけられていた事が知られるのである。

四 第一次江戸遊学

右の如く家郷に在つて学を修めていた海鷗は、嘉永六年（一八五三）、十八歳、始めて江戸に上つた。「略伝」に、「幼にして家学を修め、長じて贄を安積良斎に執る」と言うから、良斎に入門の礼を執るために上つた、と思ふ。『海鷗遺稿』の巻頭に掲げられる五律「東海道中」は、題注に「余、時に年十八、始めて江戸に赴く」とあつて、この時の作である。

「单身辞故国	单身	故国を辞し
万里試東遊	万里	東遊を試む
「堰水流沙上	堰水	沙上に流れ
芙蓉落馬頭	芙蓉	馬頭に落つ
祖竜従此地	祖竜	此の地よりし
「祠廟有遺丘	祠廟	遺丘有り
慷慨思功業	慷慨	功業を思ひ
悲歌忘旅愁	悲歌	旅愁を忘る

独り故郷を離れ、

遙か遠く江戸に遊学してみる。

大井川が砂原を流れ、

富士山は馬の頭のかなたに見える。

神祖家康公は、ここ三河から起ったが、

その御霊屋が建てられた久能山はこの地にある。

幕府を樹立した功業を思いやって感激し、

哀切に詩を吟じて、旅の憂さを晴らす。

全篇、対句をもって仕立てた点が珍しい。嘉永六年といえ、六月三日にペルリが来航し、幕末の激動が始まる時であるが、この詩にはまだそうした動きは反映されていない。しかし、このすぐ後には、後述する如く、黒船騒ぎが始まるのである。

海鷗が来った江戸には郷里の先輩である小原鉄心と長兄の菱田九瀬とが待っていた。大都會の江戸に来て、西も東も分らぬ海鷗は、この二人にいろく世話になった筈である。なぜ、この二人が江戸にいた事が分るのかと言えば、小野湖山に「癸丑至日、鉄心小原大夫招飲、席上に無將其不来恃吾有以待之の字を分ちて韻と為し、余は無字を得たり、此の日会する者は岡本黄石・大槻磐溪・安岡元吉・鷺津毅堂・小林畏堂・西島大車・菱田九瀬、及び余なり、藤森弘翁は約すれども至らず」詩(湖山楼十種本『火後憶得詩』)があるからである。即ち、この詩題に拠って、嘉永六年十一月二十二日、鉄心が冬至の宴を江戸溜池の藩邸に開き、九瀬もそれに参加していた事が明らかになるからである。九瀬が

菱田成祥の号である事は、『玉池吟社詩』（弘化二年刊）一集二に「菱田旗字成祥、号九瀬、美濃人」とあるに拠つて知られる。なお、湖山の詩は、その年のその会の雰囲氣をよく伝えているので引いておこう。

至日之会年年有

至日の会は 年年有るも

今年至日常歲殊

今年の至日は 常歲に殊なる

心之憂矣不可忘

心の憂ふる 忘るべからず

何得歲月付游娛

何ぞ得ん 歲月 游娛に付するを

主人出令囑諸客

主人 令を出して 諸客に囑す

試論今古辨紫朱

試みに今古を論じて 紫朱を辨ぜよ

就中急務在辺警

中んづく 急務は辺警に在り

防禦孰是最良図

防禦 孰いれか是れ 最良の図ぞと

我聽此言起且拜

我 此の言を聴きて 起ちて且つ拜す

久矣洪量容狂疎

久しいかな 洪量 狂疎を容るること

事関家國無可默

事の家國に關はれば 黙すべき無し

談限風月胡為乎

談の風月に限る 胡なをか為さんや

要斬鯨鯢鎮瀚海

要は鯨鯢を斬り 瀚海を鎮む

誰敢顛傾任匡扶

誰か敢て顛傾 匡扶に任せん

痛哭之書思賈傳

痛哭の書には 賈傳を思ひ

審敵之篇推老蘇 審敵の篇 老蘇を推す

和蕃婁敬言空巧 蕃に和する 婁敬は言 空しく巧みに

売国秦檜繁有徒 国を売る 秦檜には 繁く徒有り

巨艦大礮抑亦未 巨艦 大礮 抑も亦た未だし

只期廟略固根株 只だ期す 廟略 根株を固むるを

嗚呼一呼吸間剝復麥 嗚呼 一呼吸の間に 剝も復た麥せん

待看乾坤瑞氣敷 待ちて看ん 乾坤に 瑞氣敷くを

事機之会君須記 事機の会する 君 須らく記すべし

烈士忠臣無代無 烈士 忠臣 代に無きこと無からん

鉄心殿の冬至の宴会は毎年設けられるが、

今年の冬至のそれは、いつもの年と異なる。

心に憂いを抱いていて、忘れられないので、

どうして月日を娯樂にのみ費す事ができようや。

宴の主人鉄心殿は、多くの客人に酒令を出して言う。

「試みに史上の案件について、悪者と善者とを弁別したまえ。

とりわけ早急の課題は、海防に在る。

防禦策はどのような物が最も良い計略か」と。

私はこの言葉を聞いて、立ってうやうやしく申し上げる。

「貴殿は長いこと、大きな度量で、すばらな私を受け入れて下さいました。

私は、国家に関わる事ならば黙ってはおられません、

話が風流に限定されると、何ができませんようぞ。

要するに夷狄を滅ぼして海洋を鎮定すべきです。

さもなくんば、誰が傾きかける国家を助け支えようと思えますか。

痛哭して「治安策」を著わした太傅賈誼のような人材が必要だと考えるし、

「審敵」という文章を書いた蘇洵のような人物を推薦したいものです。

匈奴と和親するために公主を嫁がせる策を提案した漢の婁敬のような者は、ただ言葉が巧みなだけです、

金との和議を持つために忠臣岳飛を殺した秦檜のような者には、一味が沢山におる。

巨艦や大砲を用意するだけでは、そもそも不十分なのであって、

幕府が国の根底を固めるような政策を行う事を、ひたすら望む。

ああ、はびこる小人のために賢人が悩まされる状態（『易経』剝）は、間もなく変る事だろう。

天地がめでたい気を布くようになるのを待つ事にしよう。

事をなすによい時が来たら、君よ、心に銘記してくれたまえ。

忠臣烈士が世に現われない事はあるまい。

時に岡本黄石（四十三歳）は、彦根藩の家老職、大槻磐溪（五十三歳）は仙台藩邸の侍講、安岡元吉（五十一歳）は

川越藩儒官、鷲津毅堂(二十九歳)は上総久留里藩儒、小林畏堂は信州松代藩真田信濃守幸教(まきのり)の儒臣、西島大車は未考。鉄心がペリリ来航に鑑みて海防策を一同に問ひ、慷慨の士である湖山が切齒扼腕して攘夷論を主張し、幕府の軟弱な態度をそしめる様が如実に想像されるのである。なお、『鉄心遺稿』一、嘉永六年の件りには、この日の詩は収録されていない。

五 小原鉄心・江馬細香の知遇

右の江戸遊学は、長い間の事ではなく、翌安政元年(一八五四)春には、海鷗(十九歳)は、既に大垣に帰っていた。ただし、それ以前、正月十五日にペリリが浦賀に来航した折、彼は塾の門人たちと黒船を見に行っている。その事は、十三に更めて述べる。帰国後、彼は、小原鉄心(三十八歳)・江馬細香(六十八歳)・大夢・竹雨と、岐阜に遊び、長良川で桃を見ている。鉄心に、「細香・大夢・竹雨・海鷗と共に岐阜に遊び、桃花を長良峡に観る。酔後偶ま作る」(『鉄心遺稿』二)があつて、安政元年の所に配せられている。

帥兵昨在相州地

兵を帥(ひさ)みて 昨は相州の地に在り

我骨期埋東海沙

我が骨 埋めんことを期す 東海の沙に

今日生還岐山下

今日 生還す 岐山下

春風流水醉桃花

春風 流水 桃花に酔ふ

昨日は兵をひきいて相模さがみの浦賀におり、

我が骨を関東の海の砂浜に埋めてもよいと思っておった。

今日は、岐阜の山麓に生きて帰る事ができて、

春風の吹く川辺で桃の花を眺めながら酔っておる。

起句は、安政元年（一八五四）正月十六日、ペリーが再度浦賀に來航した時、鉄心が藩兵をひきいて正月二十一日から三月五日まで浦賀に出張した（『小原鉄心伝』「米艦渡來と鉄心の浦賀援兵」）事を言う。その後、鉄心はすぐに大垣に帰り、細香や海鷗と一緒に桃花を見る機を得たのである。大夢は木蘇大夢の事で、名は良、大夢は字、髯脚、また叢州外史と号した。本姓は小川氏、厚見郡佐波村觀音寺に生まれた。広瀬淡窓に学び、詩画を善くした。木蘇岐山の父である。竹雨は、いかなる人物か未考。鉄心は、

嗚呼、予と細香と天稟の異なること氷炭の如し。而るに交誼の厚きこと膠漆の如き者は何ぞや。是れ予の自ら解すること能はざる所以なり。（『湘夢遺稿』序）

と言うように、全く性格を異にする老嬢細香と極めて親しかったのであるが、それと並んで海鷗も、鉄心が公務の緊張と憂さを晴らす風流韻事を持つ際の良き相手となっていたのであろう。

六 佳 居

安政三年（一八五六）には、海鷗は二十一歳であるが、既に分家して、小原鉄心の別荘無何有荘の隣りに居を構えて

いた。無何有荘は、鉄心の二祖静楽君忠顕・三祖水波君忠珍が城北林村に隠居所を構え、その後荒廃したものを安政二年冬に鉄心が再興した所である。その五月二十八日に、海鷗が鉄心と鴻雪爪を迎えた事、及び海鷗住居の模様と暮しぶりは、雪爪の『山高水長図記』上「鷗居話雨」に記されている。

門に翠竹有り、池に芙蓉有り、牕に芭蕉有り、座に鉄心居士有り。主人は海鷗たり。此の数者有れば、余や以て遊ぶべきのみ。是の日、雨意蕭澹、談じて百年後の事に及ぶ。飲みて三蕉を過ぐるを覚えず、陶然として黒甜郷に入る。時に丙辰(安政三年)五月念八日なり。

小野湖山曰く、海鷗の居、余之を知る。賓主三人は皆余の心知なり。清閑の遊、此の如し。余 憾むらくは一盃あづかに与らざるのみ。

(岡)鹿門曰く、余、鉄心を訪ふ。鉄心、留めて曰く、明日、旁近の名流を無何有荘に会して勝筵を設くと。会に往けば則ち客を致す



海鷗住居図

『山高水長図記』上「鷗居話雨」所収
門の翠竹、窓の芭蕉、池の芙蓉、皆本文通りである。三人の人物の内、中央が海鷗、右が鉄心、左が雪爪であろう。



鴻雪爪七十歳肖像
服部空谷著『鴻雪爪翁』より

こと二、三百人、興闌はにして、鉄心、十餘輩と、余を要して一家に過ぎり、絃歌の筵を設く。謂はゆる無何有荘は鉄心の別荘なり。海鷗、その隣に家す。三十年前の事なり。

鹿門が大垣に鉄心を訪れたのは、五年後の文久元年四月十四日の事で、『在臆話記』第三集卷三に詳述されているが、その日の事は後述する。小原鉄心は、安政三年に四十歳、前年に組頭城代に任せられ、藩軍政の改革を断行していた。雪爪は、四十三歳、本姓は宮地氏、藝州御調郡因の島の人で、弘化三年（一八四六）四月、大垣藩主の招きに応じて、大垣の桃源

山全昌寺の第二十五世となった。鉄心の禅学の師で、詩文に通じ、政治的な智略を有していた。その『山高水長図記』三卷（明治二十七年、養苔山房開雕）は、清の麟見亭の『鴻雪因縁図記』に倣って、自己の踪迹を漢文で記し、一文に一図を付した、美麗な著作である。この書の文章には海鷗も助力した事は、後述するであらう。こうして、以後も二十三年も若い海鷗と親交を持つことは、あらためて後述する。

七 毅斎の死

安政四年（一八五七）は、海鷗、二十三歳。二月十三日に、父毅斎が亡くなった。享年七十四。父の行状や死について海鷗が言及したものは見当たらないが、翌五年十二月五日、海鷗の母が亡くなった折に鉄心が詠じた「菱田士瑞、母を喪ひ、追悼殊に甚し。詩以て之を慰め、兼ねて教誡の意を示す」（『鉄心遺稿』三）の前半に、その時の海鷗の様子を

窺うことができる。

豪宕客

豪宕の客

奇傑士

奇傑の士

羈束以用之

羈束 以て之を用ひば

殊勲掌可指

殊勲 掌たなごころを指すべし

吾友鷗生是其人

吾が友 鷗生 是れ其の人

成童已見才銳偉

成童 已に見る 才銳の偉なるを

乃翁慧眼曾有言

乃翁の慧眼 曾て言ふ有り

此兒偉器家可起

此の兒 偉器 家起すべしと

翁既逝矣唯存母

翁既に 逝けり 唯だ母を存するのみ

母教誠存三遷旨

母教 誠に存す 三遷の旨

器已欲成才愈逸

器已に 成らんとして 才愈よ逸し

烟霞狂癖從此始

烟霞の狂癖 此より始まる

有似健馬脱銜轡

健馬の銜轡を脱するに似たる有り

奔蹏之勢不可止

奔蹏の勢 止むべからず

我思翁言謀有人

我 翁の言を思ひ 謀るに人有り

雪爪禪師立堂子

雪爪禪師 立堂子

一夕相会延鷗座 一夕相会し 鷗を座に延き

苦言慇懃針其髓 苦言 慇懃 其の髓に針す

鷗也唯唯遽然去 鷗や 唯唯 遽然として去り

我且疑之使人尾 我且く 之を疑ひ 人をして尾せしむ

果能帰家謝前非 果して能く 家に帰り 前非を謝す

慈淚漣然泣且喜 慈淚 漣然として 泣き且つ喜ぶ

榻来夙夜在膝前 榻来 夙夜 膝前に在り

親承歛心苦看視 親しく歛心を承け 苦ろに看視す

.....

豪放な人物、

秀でた男は、

手綱をしめながら、これを活用すれば、

いちじるしい功績を挙げることは、手のひらを指すように明らかな事だ。

我が友人海鷗君こそ、そうした人物で、

十五歳になると、もう立派な才能が現われている。

父君は鋭い眼力の方で、ある時、おっしゃった。

「この子は、すぐれた人材で、きっと家をおこすだろう」と。

父君は亡くなってしまい、母君だけが生きておられた。

母君の教育には、本当に孟母の三遷の教えのような周到さが備っていた。

海鷗が成人する頃、才気はますます逸出して、

花柳の巷に遊ぶ習いが、その頃から始まった。

それは、足の速い馬が羈束を解かれたようなもので、

足を伸ばして駈ける勢いは、留めることができぬ。

私は父君の言葉が実現しない事を心配し、人に相談した。

雪爪禪師と小野崎立堂である。

ある夕、三人が集って、海鷗を座に呼び、

ねんごろに忠告して、その悪癖を戒めた。

海鷗は、はいはいとうなづいて、あわただしく立ち去る。

私は暫し彼の承諾を疑って、人に跡をつけさせた。

彼は言葉通りに家に帰って、母君にこれまでの誤ちを詫びている。

母君は涙をさめくと流して、泣きながら喜んでおられる。

爾来、海鷗は日夜、母君のまぢかに在って、

丁寧な御機嫌を伺い、見守っていた。

.....

これに抛れば、海鷗は、父が亡くなると、間もなく遊蕩し始めたらしい。そして、その遊蕩は留処もなく、海鷗に期待する周囲の人々を甚だ憂えさせるものであった。翌安政五年、江戸に遊学する海鷗が、途中、郷里の詩僧溪毛芥に送った詩に毛芥が答えた「菱田海鷗の途上に寄せらるるに次韻す」(『毛芥遺稿』)があるが、その注には、「海鷗に愛妓有り、歌曲を好む故に云ふ」とあり、海鷗が愛妓を大垣に置いて江戸に上った事を詠するから、彼には寵愛する妓女ができて、それにのめり込んだものであらう。

鉄心は、これを心配して、訓戒を与えたりしているが、海鷗の遊蕩には実は鉄心も責任の一端がある、と思う。といふのは、器度の大きい鉄心は、酒を飲む際には妓女を挙げて派手に楽しむので、早くから鉄心に随従していた海鷗は、若年からそのような遊び方に慣れており、それが遊蕩にのめり込む一因になったのであらう。

もう一つの要因は、毅斎の死亡によって拘束から解放された事であらう。既に述べたように、父の毅斎は立派な君子儒であって、その生存中には、海鷗も身を慎まざるを得ず、羽目をはずすような事は、あまり無かったであらう、と想像される。しかし、毅斎が亡くなって、軛がはずれると、風流才子肌の海鷗の内でもこれまで押さえられてきた蕩情が



溪毛芥像 (『大垣市史』)

一気に解放されて、奔馬のように逸出したものであらう。方正な儒家の裡に育った詩人肌の鋭敏な青年が、突如、遊蕩に奔ったり、体調を狂わせたりする事は、頼山陽や広瀬旭莊の例に見られるように、まま存する事であって、海鷗の場合もそうした例であつたらう、と思うのである。

しかし、元来が聡明で母親思いの海鷗は、一夕、鉄心・雪爪や、大垣藩士小野崎立堂の訓戒を聞くと、翻然、心を入れ替えたのである。

なお、溪毛芥は、名は英順、字は秋堂、毛芥は号である。文政元年一月八日、



小野崎立堂像

大垣船町誓運寺に生まれた。詩を神田柳溪に学び、後に雲華大舎の門に入った。誓運寺住職に在ること、およそ四十年、明治十六年十月十九日、京都六条の客舎で病没した。享年六十六。南条文雄の父である。

小野崎立堂は、名は徳、字は支離、通称は五右衛門、大垣の町奉行を務め、慶應初年、藩主の側役となり、明治になっては大垣藩大参事となった。同十年三月十三日没。享年五十。

八 藤森弘庵・斎藤拙堂の来訪

この安政四年には、七月に藤森弘庵が大垣を訪れている。鉄心が招いたのである。その月の十六日、雪爪が弘庵を養老の滝に案内し、それより横曽根村の豪家安田彦八のもとを訪れたところ、鉄心が「韻流(詩人)数人」を舟に載せて来り、蘇軾の赤壁賦の字を分って韻字となし、それぞれ詩を詠じた事は、『山高水長図記』上「老山観瀑」や、鉄心の「弘庵老儒・雪爪禅師及び諸子」と共に、舟を広洲に泛ぶ、時に七月既望なり(『鉄心遺稿』二)に見る事ができる。中元、即ち前日十五日にも、鉄心の知人十数名が正覚寺に弘庵と飲んだ事は、野村藤陰の「中元、戸田敢堂・小原鉄心の両大夫、藤森弘庵翁を正覚寺に招飲す。此の日、会する者十数名、余も亦た陪す焉。字を分ちて落字を得たり」(『藤陰遺稿』一)によって知られる。望月茂著『藤森天山』(昭和十一年、藤森天山顕彰会)十五「関西遊歴」にも、雪爪の談話に基づいて、大垣来訪の事は記されている。それらのいずれにも、「韻流」「諸子」「十数名」とだけ記されているの



高岡夢堂像

で、その内に海鷗が右の舟遊や詩宴に加っていたのかは不明なのであるが、鉄心と海鷗の関係を考慮すると、彼が加っていたであろう事は、十分にあり得るのである。

ついで九月には、鉄心の師である斎藤拙堂が大垣を訪れた。勿論、鉄心の招きに応じたものであろうが、同時に土地の名医江馬氏に治療を乞うためである。この時の拙堂と大垣の詩人たちの交歓の様は、拙堂の『統澡泉餘草』

(呉鴻春氏輯校『鉄研斎詩存』十、二〇〇一年、汲古書院刊)に窺う事ができるが、鉄心には「拙堂先生及び誠軒・雪爪・敢堂・西溝・立堂・藤陰・海鷗の諸彦と共に、雨中、関原に到り古を吊す」(『鉄心遺稿』二)があり、海鷗が、拙堂・雪爪・戸田敢堂・高岡西溝・小野崎立堂・野村藤陰たちに随って、雨を冒して関が原の古戦場に行った事が知られる。『統澡泉餘草』には「十五日、関原の古戦場を吊す。庚子の戦、実に九月十五日たり、故に余、此の日を以て大垣の諸士大夫と往きて遊ぶ焉」という長古があり、九月十五日の事である事が知られるのである。この内、戸田敢堂は、治部左衛門と称し、藩の家老である。高岡西溝は、名は清宣、字は哲夫、別に夢堂と号し、通称は三郎兵衛。藩の用人であり、慶應二年十月には藩校致道館の督学になった。明治二年七月、大垣藩大参事に任せられ、十月十一日、病没した。享年五十三。船町全昌寺に葬られる。この時の鉄心の詩には、

高人徹夕吐奇論　高人　徹夕　奇論を吐く

引得餘豪晚出門　餘豪を引き得て　晚に門を出づ

訪水尋山本閑事　水を訪ひ　山を尋ぬ　本より閑事

一鞭衝雨到関原 一鞭 雨を衝き 関原に到る

賢者拙堂先生は徹夜で優れた論を説かれ、

早朝、他の豪傑たちを連れて出発なされる。

ありきたりの山や川を探訪するのは、遊び事に過ぎないから、

馬に鞭をくれ、雨を冒して、関が原に吊古に行った。

とあって、鉄心や海鷗たちは、九月十四日の夜から拙堂に待して、終宵、その奇論を傾聴し、朝になってそのまま関が原に赴いたのであるらしい。

拙堂は、「十七日、小原氏の鉄心居雅集あり、是の日来会する者、藩の人士を除く外、緇流に雪爪・霞山・大夢有り、関秀に細香有り、画師に杏村・訥齋有り」と題する七絶を作っている(『続澡泉餘草』)から、九月十七日にも、海鷗は鉄心の無何有荘において、拙堂・鉄心・雪爪・日野霞山・木蘇大夢や細香などと一堂に会して詩を詠じたのであろう、と推測される。

九 藍川の遊び

古人に句あって言う、「好句 翻かえって思の外より得、佳遊多く関中かんちゆうに向て成る」と。偶然が好結果をもたらす事を言うのである。安政四年十月十九日、早朝、鉄心が雪爪に書翰をよこして、ともに竹鼻(羽島市竹鼻町)に遊び、霞山人



香谷の墨絵

『山高水長図記』上「雪簷夜舳」所収

(日野霞山)の廬に集まろう、と言う。

この日は霜が朝日に輝くような晴天で、遊情が勃然として起り、そこで竹杖を用意して全昌寺を出発した。途中、高岡西溝と海鷗の二人が連れ立って歩いている。天気は春のようで、村の木々は黄葉している。渡しに至ると舟を招き、倦めば石を払って憩い、喉がかわけば瓢を傾けて飲む。たちまち雨が降って来て、笠が飛びそうになり上着がぬれる。

数村を過ぎると、遠くから馬のいななきが聞えてくる。西溝と海鷗が言う、「あれは鉄心殿の乗馬でしょう」。着いてみると馬が老柳の下に繋がれている。門を見つけて入ると、鉄心が既に坐っており、霞山が酒を用意していた。山葵・歎冬など、肴は香ばしく清潔である。飲む合間には書画を物して感興を助ける。

鐘が夕べを告げると、鉄心が言った。

「帰りは舟を藍川に浮かべて、餘興を尽くそう」

岸へに行くと、風波がにわか起って、舟をやる事はできそうにもない。鉄心は、船頭を勵まして舟を進める。空は真っ暗になり、咫尺も辨じられず、ただ雁の鳴き声と櫓声とが聞

えるだけだ。皆は篷の下に頭を集めて、痛飲劇談し、一斗樽をもちまちあけた。鉄心と西溝は、酔って死んだように眠っている。間もなく風がやみ雪が降りだすと、鉄心はがぼと起きて、「痛快だ」と叫び、篷で頭を掩う事もせず、更に酒を浴びるほど飲もうとする。暫くたつと、凍てついた雲が次第に走り出し、冷たい月がのぞき、山と川は清らかに際だち、天地の物はすべて白く輝き、皆はまた「すばらしい」と叫んだ。

月が揺れて雪がふぶき、雪がやむと月が現われる。川は寒く水は細り、舟はしばし瀬に乗りあがる。枯れ芦の間に棹さし、墨俣^{すまた}駅に到達した。茶店で食事を取り、午前二時に寺に帰った。

以上の遊びは、曇りと晴れ、雪と月とが、瞬時に変化し、霞山の筆でも、たぶん描くことはできまい。

右は、雪爪の『山高水長図記』上「雪篷夜帰」を訳したものである。併せて掲げる香谷の墨絵も参照すると、鉄心・雪爪・西溝らと海鷗のこの日の遊びぶりが如実に窺えるであろう。

十 参 禅

安政四年の十二月二十九日夜、海鷗は、鉄心・立堂・瓦鶏とともに全昌寺に雪爪を訪れ、酒を飲み、禅を語った。鉄心に「丁巳小除の夜、立堂・瓦鶏・海鷗と共に、雪爪禅師を訪ふ。酒間に禅を談ず。偶ま五絶句を得たり」(『鉄心遺稿』二)がある。瓦鶏は、黎祁吟社の同人であった松倉瓦鶏(四十八歳)である。大垣藩医松倉春仙の子であり、堤町に住み、医を業とした。万延元年六月一日没。享年六十一。岡山安楽寺に葬られ、法号を大迂院面山日省居士という。鉄心は五絶句の内、三首を『遺稿』に収めているが、その第二首を次に掲げる。

聴師彌天語 聴く 師が弥天みへんの語

万慮付浮漚 万慮 浮漚に付す

一点真如月 一点 真如の月

来照我心頭 来りて我が心頭を照らす

雪爪師の天に満ちわたる広大な教えを聴いたら、
すべての雑念は、あわの如く消えた。

そして、一箇の真理が、

月のように来って、私の心中を明るく照らした。

鉄心が雪爪に熱心に参禅した事は、服部空谷著『鴻雪爪翁』（昭和十三年十二月、古鏡会発行）三「全昌寺時代」に
詳しく、『在臆話記』三・三にも、

鴻雪爪ノ懐旧談ニ、吾、大垣藩菩提寺ニ寄寓スル十年、鉄心トハ禪家ノ無着天親ニテ、暁六時梵鐘ニ鉄心警起、来
リ敲キ、一浄室ニ入り、読書、兼テ申合せタル経史ヲ講論、他念ナキ者ノ如ク、共ニ朝飯ヲ喫シ、一瓢ヲ傾ケ、出
庁政務ヲ聴ク。公退。寺ニ立寄り談藝ニ餘興ヲ寄せ、一藩ノ全権ナレバ、諸方ヨリ招饗、爾時、必吾ト同伴、鉄心
ハ上戸、吾ハ下戸ナレバ、其家必吾ガ為メ糯餅ヲ具フル常例ナリ。其席ニハ、文字書画禅学、及四モ山ノ話ノミ。
公務ハ藩庁ニテ商議スル事ノ定メナレバ、一ノ俗談ナシ。

と述べられている。一藩の全権を委ねられている鉄心は、藩の運命を左右する重大な政治的決断を迫られる事が多く、

その際には雪爪に参禅する事に拠って、様々な雑念を去り、無念無想の静虚なる心的状態から最善の決断を下そう、とする事が屢ばであったろう。鉄心の参禅における、そのような機微が右の詩には端的に表現されている、と思う。そして、参禅に右のような効用を求める事は、鉄心の影響が大きい海鷗においても同様であったろう。

人も知るごとく、武士における参禅は、心身脱落、身も心も一切の束縛(万慮)から解放される事によって齋される不惜身命の境地を目指すものであろう。いわば、胆力の練成である。鉄心や海鷗は、結局は胆力の練成を行ったのであるが、その成果は、後年、海鷗が長州藩士に捕えられ、あわや斬首されそうになった時も、平然自若としておった、という処に発現された、と思う。海鷗の危機に臨んで縦容として迫らぬ態度には、文天祥の「従容として死に就く」〔正気歌〕態度の影響も存するであろうが、参禅による胆力練成の成果もあったであろう、と考えるのである。

十一月が瀬の遊び

安政五年(一八五八)は、海鷗、二十三歳。

正月七日、海鷗は、江馬細香(七十二歳)・雪爪(四十五歳)・松倉瓦鶉(四十九歳)とともに、鉄心(四十二歳)の無何有荘に集り、詩を賦した。細香に、「戊午人日、鉄心大夫・雪爪禪師及び松倉・菱田二生と同一無何有荘に遊び即事を賦す。時に將に大夫は東都に下り、禪師は越前に飛錫せんとす」〔湘夢遺稿〕下」と題する五絶二首がある。鉄心が江戸に行き、雪爪が越前に移住するのみならず、海鷗も二月初旬には江戸に赴く事になっているので、人生離別の思いを抱くのは、細香ばかりではなかったであろう。細香詩の第二首は、次の如くである。

浮生本如夢 浮生 本と夢の如し

聚散亦因縁 聚散 亦た因縁

今日団欒客 今日 団欒の客

明朝遠別人 明朝 遠別の人

この世は、本来、夢のようにはかない。

人が集り、別れるのも、前生からの定めによる。

今日、一堂に会している客たちは、

明朝には遠く離れる人々だ。

海鷗が二度目の江戸遊学に出発したのは、この年の二月八日の事であった。『海鷗遺稿』の第二首目に置かれる作品は、「戊午仲春^{六日}、路を木蘇に取り、再び江戸に遊ぶ、道中限るに五絶を以てし、若干首を得たり、語に倫次無く、事に触れて口占するのみ」と題する五絶の連作十首であるが、これに拠れば、二月六日に出発した事になる。ところが、雪爪の「月瀬問春」(『山高水長図記』上)には、後述する如く「二月八日」の事と記している。雪爪の記述の方が詳細なので、こちらの記述を正しいものとすると、『海鷗遺稿』の「六日」は、「八日」の誤りではないか、と考えられる。よって、出発の日を二月八日と定めておく。

雪爪の「月瀬問春」の訓読を掲げよう。

余は嘗て斎藤拙堂の『月瀬紀勝』を読み、鉄心と同一に遊ぶを期すること年有り。拙堂 之を知り、春ごとに花候を報じて遊を促す。今茲安政戊午の春、越(前) 行の期迫る。鉄心曰く、「師、錫を越に移さば、月瀬を距ること遠し。吾今、官事に羈がれ、同一に遊ぶことを得ず。乃ち海鷗をして代りに伴はせしめん。師、盍ぞ一遊せざる」と。

余、乃ち二月八日、を以て、海鷗と俱に発す。弟子月珊、焉に従ふ。大簗村に至り、渡辺春水の家に投ず。春水も亦た従遊す。九日、舟、桑名に泊る。十日、陸行し、官道よりし閑駅に宿る。途に檠戟の敵隊を見る。幕使岩瀬肥後守、京師に朝するなり。盍し米艦の相(模) 海に入りしより、公武、議を異にし、幕吏の往来、特に頻煩たり。十一日、左折して伊(賀) 州に入り、上野の逆遊に宿る。此の地、月瀬を距ること遠からず、喜氣津々として寐ねず。十二日、路を西南に取り、行くこと二里よりして近し。已に溪風の香を送るを覚ゆ。一小阪を踰ゆれば即ち溪口なり。路傍に梅有り、花を着くこと七、八分、果して陰り、細雨俄かに至る。余 固より濟勝の具(健脚) に乏し。而して壠を過ぎ谿を度り、老脚疲ること甚し。乃ち笠を戴き牛に騎りて行く。酷だ望嶽の西行と相肖たり。海鷗に詩有り、曰く、「路は幽溪に入り雲幾層、仙家の鶏犬 田腔(あせ) を隔つ、此の遊 第一の奇を添ふる事、細雨に梅を問ふ 牛背の僧」と。下午、尾山村に達し、山家に宿ることを約し、直ちに梅溪に入る。兩方に止み、粉蝶数千万の遠林に舞ふを見る。疑ふらくは是れ落梅の風に飄へるか。近づけば則ち雪なり。諸子皆驚喜して奇と呼ぶ。乍ち雨ふり乍ち雪ふる。山中の氣候の異なる、大率此に類す。返りて山家に投ず。浴槽を梅下の下に置く。真率喜ぶべし。主人、薯を劔り盃を侑む。真味 嚼むべし。微醺散步せば、月は梅花を照らし、銀海に浮ぶが如し。余 嘗て真福寺の勝を耳にす。花を穿ち寺に抵れば、境 最も幽に、花 逾よ饒く、地として花影ならざるは無く、影として横斜ならざるは無し。彷徨吟嘯、前峰に月落つるに至る。

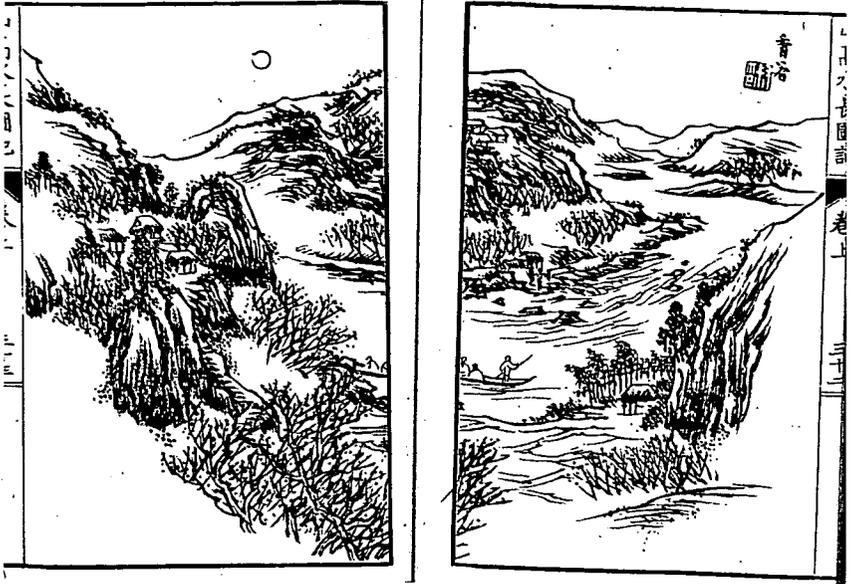
十三日、曉晴、鳥語、人を呼ぶ。余が心 花溪に馳せ、飯せずして出づ。梅蹊を行くこと數百歩、石を払って跪く。左顧右眄、溪巒の花、烟に罩められ猶ほ眠るがごとし。墩光嵐影、前夜と觀を異にす。顧みて諸子と呼び、歩きて前崖を下れば、竹陰に舟横はる。曰く嵩村の渡しと。山中客少なし。渡舟を傲ひて溪流を溯洄すれば、明漪底に徹り、花影 玉を砕くがごとし。崖巖を仰ぎ見れば、松竹、梅花を護り、奇絶清絶、惜しむらくは鉄心と觀を同じうせざるを。時に腹、飢を告ぐ。主人、行厨を餉る。団飯塩梅のみ。諸子争ひて喫す。余 笑つて曰く、「謂はゆる晚食肉に当る者か」と。

騎士、従者數人を率ゐて至る。篙夫告げて曰く、「近日、洞津（伊勢、安濃津）侯、遊覽す。上野城番藤堂某君、預め道路を検するなり」と。余 曰く、「馬を花徑に馳すれば、恐らくは花神を驚かさのみ」と。乃ち詩有りて曰く、「万玉林中に流水長し、扁舟杳として入る小仙郷に。此の行若し大官の後に落つれば、未だ必ずしも梅花爾許香らざらん」と。

客の瓢を携へて前岸に立ち余に揖する者有り。其の名を問へば則ち池雲樵（池田桂莊。名は政敬、字は公維。南画家）なり。即ち同に吾が舟に載す。雲樵、奇遇を喜び、頻りに瓢酒を傾け、墨斗を抽きて舟中对酌図を作り、一揖して去る。余も亦た舟を捨てて南岸に上り、月瀬村に至る。梅花、谷を填め巔に満ち、遠く西溪の花と連絡して、其の幾万珠なるかを知らず、真に梅花国なり。

然れども梅花の妙は、必ずしも多きに在らず。槎牙たる半樹、水辺の籬落に隠見する、殊に韻致有り。但だ梅花に寢食する者にして、能く之を知るのみ。月瀬の絶勝、盛んなることは則ち盛んなり矣。然れども未だ必ずしも彼を魯とし此を周とせず（彼此に差別をつけない）。

哺時（午後四時頃）、山を出で、一更（午後十時）、上野の逆旅に投ず。餘興 恍惚として、猶ほ水姿玉貌の灯光酒



香谷の墨絵

『山高水長図記』上「雪簷夜榻」所収

影の中を往来するを見るがごとし。

十四日、路を勢州に転じ、某駅に宿す。

十五日、洞津に抵り、拙堂を訪ふ。余、先に誇りて曰

く、「月瀬の遊、奇なるかな」と。拙堂曰く、「夫れ然

り。莊周（『外物篇』）言ふこと有り、云う、『人、能

く遊ぶこと有れば、且た遊ぶことを得んや。人に

して遊ぶ能はざれば、且た遊ぶことを得んや」と。方

今、海警四もに伝はり、物論恟々たり。隠然として有

為の勢を張る者有り。而るに廟廊の士、智困くろしみ神頓とどま

り、跬步きほ（わずかに歩む）すること能はず。師は道眼

に大機を看破し、此の時に当りて閑遊を為す。遊、其

の時を得、遊、其の地を得たり。其の遊の奇、亦た宜

ならずや」と。相与に哄然たり。時已に日夕、余、辞

し去る。拙堂、明日の別墅の会を訂ただす。帰路、土井琴

牙を訪ふ。談偶ま書画に渉る。燭を秉りて数幅を観

る。

十六日、棲碧山房に遊ぶ。拙堂の別墅なり。山に倚り

海に面し、眺望佳絶。拙堂、置酒して款待す。宮崎青

谷・井田五蔵も亦た在り。筆硯もて清らかに娛む。拙堂、詩有りて曰く、「客の香国より至り、我に向つて溪囊を解く。勝を記して篇々璨たり、遊を談じて語々芳し。時に啼鶯の在る有り、暫く帰鶴の翔るを留む。言ふ莫かれ草堂の上、白雲郷に若かず」と。青谷、月瀬図を写して以て贈る。拙堂、余が此の遊を喜ぶも、而も鉄心の偕にせざるを憾み、酒間 屢ば之に言及す。遂に燭の跋よろけるするを見るに至りて散す。

十七日、拙堂父子、余を送りて四天王寺に到る。寺の所蔵の東坡の画竹・半山（王安石）の墨蹟を觀る。拙堂曰く、「蘇・王、当時、氷炭相容れず。今、師の化する所と為り、一堂に相見え、確執を忘るる者の如し」と。一咲して別る。

路、二宿を経て大垣に帰り、鉄心と梅溪の游を話す。翌日、大垣を發して越山に入る。

右の、風流の内に時勢談が程よく混じる遊記には、いまだ詳しくは明らかにされていない安政五年二月の拙堂（六十歳）の消息が詳しく述べられている事もある、敢て長い訓読文を掲げる事にした。これに拠つて、海鷗の遊学は、鉄心の代理として雪爪に同伴して月が瀬に遊ぶ旅から始まった事が明らかにするのである。海鷗の名は二月十二日まで見え、そこで紹介されている彼の七絶は、『海鷗遺稿』には収録されていない物だが、その後、海鷗が大垣に戻つて来るまで、ずっと雪爪に同行していたのか否かは明記されていない。しかし、彼が途中で雪爪たちと別れたという事も記されていないから、大垣まで雪爪に従つて戻つて来、それから江戸に向けて出發したのであろう、とも考えられる。そして、そうだとすると、後に述べるように、海鷗は、丁度、江戸に赴く鉄心に同行して、中仙道を経由して江戸に行つた、と考えられる。足かけ九年後の慶応二年六月十三日に木曾川で作つた詩「鬼淵台、有懐鉄心大夫」の題注に、「十年前、大夫に陪して、月を此に看る」と言うからである。もし、そうだとすれば、海鷗はこの時、拙堂や土井琴牙（四

十二歳)に会っていた筈である。

十二 第二次江戸遊学

前述したように、海鷗は、江戸に赴く前に、まず大和の月が瀬に向ったのであるが、彼にとってはそれも江戸遊学の旅の一端であったのであろう。十一に述べた如く、この旅の最初に当って十首の五絶を作っているので、まずその第一首を紹介しておこう。

弘農離故里 弘農に 故里を離る

回望悵難去 回望すれば 悵として去り難し

猶見樹間灯 猶ほ見る 樹間の灯

是吾読書処 是れ吾 書を読む処

早朝に故郷を出発する。

振り回って見やると、未練が残って立ち去りがたい。

まだ木の間に灯火が見えるが、

あれこそ私が書を読んでいた所だ。

未練がましく立ち去りかねているのは、大切にしている母や兄、さらには知友と別れるからである事は勿論だが、前述したように、彼には寵愛する妓女がいて、それに想いが惹かれていた、という事情も存したからであろう。

江戸に行く途上で、海鷗は、溪毛芥に詩を寄せたらしい。その詩は見ることを得ないが、『毛芥遺稿』には前述したように、「次韻菱田海鷗途上見寄」が安政五年の作品群の内に収められているので、そのように言うことができるのである。その詩は次の如くである。

健筆駆飛轂 健筆 飛轂を駆り

嬌歌遏行雲 嬌歌 行雲を遏む

長卿題柱去 長卿 柱に題して去り

閑却卓文君 閑却す 卓文君を

君の筆が早い事は、飛び散る轂あられのようであり、

愛妓はなまめかしい歌を唱って、雲のように行こうとする君を留めようとした。

君は司馬長卿（相如）が柱に文を記して去ったように出かけ、

相如の妻卓文君にも当る愛妓を打ち捨ててしまった。

前述したように、海鷗の愛妓は歌曲を善くしたのであり、承句は、さぞかし愛妓が彼の出発を引き留めたであろう、と詠ずる。これは、『博物志』八、秦青が悲歌すると、その響きが行雲を遏めた、という話に基づく。

江戸に到着して、再び安積良斎の塾に入門した海鷗は、神田駿河台の西紅梅町に在った良斎塾の寄宿舎に入った事と思われる。この時より前には、清河八郎・江田霞村・松林飯山・間崎滄浪などの俊秀が良斎塾で学んでいたが、今はそれぞれ退学していた。

塾では暫く静謐な勉学の時を過していたようで、作る詩も穏やかなものが続いている。「家園の花卉を憶ひて任興に寄す」という七絶は、彼が花好きであった事を語っている。

憶起家園手自栽 憶ひ起す 家園 手自テヤから栽カふ

薔薇芍薬遍踈籬 薔薇 芍薬 踈籬スサに遍ヒねきを

薰風今日花応好 薰風 今日 花 応オウに好コトかるべし

寄語汝曹無折枝 語を寄す 汝が曹 枝を折る無かれ

思ひ出せば、実家の庭には自身花を植えて、

バラもシャクヤクも籬まがきに一杯咲いていた。

風薫る今日この頃は、花はさぞかし綺麗な事だろう。

君たちに言っておく、枝を折らないようにしてくれたまえ。

転句の「薰風」という語に拠り、およそ陰暦三・四月の交に作った詩と思われる。

やや後と思しき頃に作った詩に、「桐陰に書を読む」がある。

心自悠然楽有餘　心おのずか自ら　悠然として　楽みて餘り有り

呢喃燕語日長初　呢喃たる燕語　日　長き初め

点塵不到梧桐下　点塵　到らず　梧桐の下

一榻清風坐読書　一榻の清風　坐るに書を読む

心は自然とゆったりし、楽しくてたまらぬ。

日は長くなりだして、燕の雛はチタ々とさえずる。

少しの塵も無い梧桐の下、

縁台で涼風に吹かれながら慢然と読書する時。

転句に「日長初」と言うから、春分が過ぎた頃、陰暦でおよそ四、五月の交の作であろうか。清福な書生生活を送っている事が想像される。

次の「浴後に欄に倚る」は、やや暑くなった五・六月の交の作であろう。

風動丁東簷馬鳴　風動きて　丁東として　簷馬鳴る

浴餘涼味葛衣輕　浴餘の涼味　葛衣輕し

低松不礙江天望　低松　礙さまたげず　江天の望を

起倚欄干看月生　起ちて欄干に倚り　月の生ずるを見る

風がそよぐと、チンリンと風鈴が鳴る。

風呂あがりの身は涼しく、かたびらも軽い。

松は低く、川の上空がよく見わたされ、

立ちあがって手すりにもたれ、月がのぼって来るのを眺める。

隅田川畔の風呂屋に行った時の作であろうか。後藤松陰の評に、「人間の快樂、何物か之に過ぎん」と言う。

十三 アメリカ船見物、攘夷論

安政五年の六月十三日、二隻の米艦が下田湾に入った。十六日には、ロシア艦も下田に來り、英・仏もやがて來らんとする形勢である。外国応接掛がかりの下田奉行井上清直と目付岩瀬忠震ただなりは、米使ハリスと神奈川沖で応接し、十九日、大老井伊直弼の決断を経て、ついに日米修好通商条約および貿易章程に調印した。

江戸においては、攘夷派の志士たちは、こうした情勢に対して悲憤やる方なかつたのであるが、安穩な書生生活を送っていた海鷗も、とうとうじつと傍観してはいられなくなつたのであろう、六月二十日、神奈川に赴いた。彼に「戊午六月二十日、金川台に赴く途中の作時に盛利船、近岸に來る」(『遺稿』)がある。

松間一路近金川 松間の一路 金川に近し

極目南方水接天 目を南方に極むれば 水 天に接す

棋布遠帆残照外 棋布せる 遠帆 残照の外

三橋先認米夷船 三橋 先ず認む 米夷の船

松林の間の道を通して、神奈川の近くまで来た。

南の方は見渡す限り海が天に接するまでに広がっている。

夕陽のかなたには遠く帆船が碁盤の石のように浮んでおり、

アメリカ船の三本マストが真っ先に眼に入ってくる。

ポウハタン号などの米艦が三本のマストを立てている事は、『幕末、明治、大正回顧八十年史』第一輯（昭和八年、東洋文化協会発行）などに収められた図によって確認できる事であり、海鷗の詩は、見る所をありのままに描写したものである事がわかる。しかも、米艦を「米夷船」と表現している点に、彼の攘夷意識が反映されているのである。

その日、神奈川駅の旅館に宿泊した海鷗は、月が「虜船」（米艦を罵って言う語。「金川駅楼に月を見る」の語）のマトに懸かる光景を眺めたりしたが、眠られないままに、「是の夜寐ねず、懐ふこと有り」を作った。

月落悽煙罩虜船 月落ち 悽煙 虜船を罩む

金川台下水如天 金川 台下 水は天の如し

故人不見風光異 故人は見えず 風光異なり

倒指曾遊已五年 指を倒せば 曾遊 已に五年

月は落ちて冷たいもやが米夷の船を包んでおり、

金川の高台の下には海水が天のように広がる。

あの時の友人たちは、もはや居なくなり、風景も変ってしまった。

指折り数えれば、以前ここにやって来たのは、もう五年前の事だ。

自注に、「甲寅の春、岩崎士義・武村豊治・山内周平の諸子と他に此に遊ぶ」とあり、嘉永七年（安政元年）の春にも、海鷗は良斎塾の同門生たちと神奈川に來た事があるのである。五に少しく述べた如く、安政元年正月十五日にはペリーが浦賀に來航したから、彼はこの国史上未曾有の珍事を三人の仲間と見物に來たのである。三人の内、岩崎士義とは、岩崎馬之助、諱は維憐、字は君義、号は秋溟の事である。馬之助は土佐藩士で、少年時代は間崎哲馬（滄浪）・細川潤次郎（十洲）と並んで三奇童と呼ばれた秀才である。良斎塾で修学の後は、帰国して、藩校致道館の助教となり、維新後は政府に仕えて諸官を歴任したが、明治十四年六月、文部省の権少書記官になり、海鷗と同僚になった。明治二十年（一八八七）十二月二十二日、五十四歳で亡くなった折には、海鷗が「岩崎維憐を哭す」を作っている事などは、後に詳述するであろう。他の二人は未考。

七月十四日、海鷗は、三月頃に江戸に來った小原鉄心、および小野崎立堂とともに舟を隅田川に浮かべて芝浦に下り、舟中、痛飲劇談、感興を極めた。鉄心に、「近日、墨・魯・英・仏の諸夷來り、都下に横行し、慨嘆言ふべからず、偶ま立堂・海鷗の二友と共に舟を泛べて、墨水より芝浦に到り、痛飲劇談、頗る豪興を極む。醉中、五絶句を作る。実に戊午中元前一日なり。三を録す」〔遺稿〕三〕がある。劇談の内容は、米・露・英・仏の夷狄が都下に横行する事を悲憤慷慨する、といったものであろう事は、容易に推して知られる。

鉄心詩の第一首は、次のようなものである。

怪髯妖目是何人 怪髯 妖目 是れ何人ぞ

来入都門扇臭羶 来りて都門に入り 臭羶せんを扇る

痛飲読騷餘憤在 痛飲して 騷さうを読む 餘憤在り

篇舟載妓泛隅川 篇舟 妓を載せて 隅川ぐかに泛ぶ

奇っ怪な頬ひげと色目しきめくは、いったい何者なのか。

やって来て、江戸に入つては、四足臭よあしいにおいを撒き散らす。

この憤りを晴らそうと、痛飲して離騷りさう〔楚辞〕の篇名へんめいを読んでも、憤りは晴れぬ。

小舟に藝者と乗り込んで、隅田川を下らせ、楽しむ事にしよう。

「名士は必ずしも奇才を須またず、但だ常に無事を得て酒を痛飲し、離騷を熟読せしむれば、便ち名士と称すべし」
〔世説新語〕任誕〕とは、晋の王恭（孝伯）の言葉であるが、鉄心・立堂と海鷗は、紅毛夷狄の跳躍跋扈を憤慨して、
妓女をまじえて豪快に飲む事によって、胸中の磊塊らいくわいをすすごうとする。三人が攘夷論者であった事は、これに拠つて明
白である。しかし、遊興費が潤沢な鉄心が、このように女性を若齡の海鷗に近づける事は、あまり芳しい結果はもたら
さなかつた。

鉄心のあとの二首は、もう録する事をしないが、第二首の転結句に、「同遊之士は皆奇傑、幽憤鼓し来りて豪興多し」

とあるのだけは紹介しておこう。それは、立堂と海鷗を、攘夷論の同志として遇している言葉であるから。

十四 母の死

九月十三日にも、鉄心は、立堂と海鷗を集め、十三夜の月を賞している。その「十三夜、立堂・海鷗と同一賦す」
『遺稿』(三)は、次のようなものである。

今霄月は寛平月 今霄の月は是れ 寛平の月

賞月人空与世遷 月を賞する人は空しくして 世と遷る

杯中别有不磨物 杯中 別に不磨の物有り

一片金光九百年 一片の金光 九百年

今夜の月は、寛平年間の月と同じだが、

その月を眺めた菅原道真は既に没し、世の中も変遷した。

我々の杯の中には、それとは別に変わらない物が映っている。

それは、九百年間持続した、輝く月光だ。

右に解したように、寛平の月を賞した人とは、菅原道真を指しており、そうとすれば、右の詩は道真の有名な、「九

月十日」〔九月十三日〕に作る本もある。寛平ではなく、延喜元年（九〇一）の作」と題する、「去年の今夜 清涼に侍す、秋思の詩篇 独り腸を断つ。恩賜の御衣 今 此に在り、捧持して毎日 餘香を拝す」という詩を意識した作であろう。そのように解すると、結句の「金光」とは、単に月光を言うのみならず、道真に見られる尊皇の心をも含意している、と考えられ、九百年以前の道真の志を我々三人が継承している、と言おうとした、とも解釈できるのである。果して然りとすれば、鉄心や海鷗たちの脳裏には、この頃より尊皇の志が醸成されており、それが後年に大垣藩の藩論を尊皇に一転させる伏線となっているのかも知れぬ。

この九月中旬であろう、良斎塾の塾長である江村彦之進（比）が周防に帰った。彦之進は、諱は厚、字は季徳、風月・酔顛と号する。徳山藩校鳴鳳館の句読師であったが、安政四年、海鷗に先んじて良斎塾に入門し、塾長となっていたのである。海鷗に、「江村季徳の周防に帰るを送る七律五首、一を録す○季徳、余に先んじて、良斎翁の塾に入り、塾長と為る」がある。帰国の時期は、鉄心の「菱田士瑞と飲む、醉中に江村季徳の帰省を聞き、二十字を書して以て之を贈る」〔与菱田士瑞飲、醉中聞江村季徳帰省、書二十字以贈之〕が、前引した「十三夜、同立堂・海鷗賦」のすぐ後に置かれており、この詩の後にも「秋日、弟任卿と共に王子村に到り、聴泉亭に飲む」が置かれている事に拠り、九月十三日からそう離れていない日であろう、と考えられる。九月中旬とした所以である。彦之進は帰国後、学館訓導役となり、藩政に参じて海防局長・会計局長となる。攘夷論者であったために藩の恭順派から暗殺せられ、元治元年（一八六四）八月十二日、三十三歳で早死にする事になる。海鷗の詩は、次のようなものである。

経年卸笈客江都 年を経て 笈おひを卸おろし 江都に客たり

学就今朝笑上途 学就りて 今朝 笑ひて途に上る

愁夢常因思父母 愁夢は常に父母を思ふに因る

帰心不是為尊鱸 帰心は是れ尊鱸じゆんろうの為ならず

一帆風月三千里 一帆の風月 三千里

両口霜刀七尺軀 両口の霜刀 七尺の軀

敢贈藹言君努力 敢て藹言あひことを贈る 君努力して

莫教俗吏罵迂儒 俗吏をして迂儒と罵らしむる莫かれ

君は、去年から江戸に旅道具を置いて滞在していたが、
学業成就して、本日、晴れやかな顔で帰途につく。

故郷に帰りたがるのは、いつも故郷の両親の事を心配して、夢に見るほどに愁えていたからなので、
晋の張翰のように尊羹（あつもの）と鱸膾（すずきのなます）をなつかしがってではない。

船に乗られたなら、遙か遠くまで風景や月を眺めて、
二振の霜のように輝く大小刀を長身に帯して行かれる事であろう。

この際、贈っておきたい言葉は、「君よ十分に務めて、
物のわからない役人に『役に立たない迂儒』と罵倒させないように」というものです。

鉄心の詩でも、「君は言ふ阿母を省すと、帰去由かきゆ有るかな、狂瀟 世を翻す勢、家国人材を急にす」と言うから、彦
之進は母の病いを省するために帰国するのであろう。

十二月五日、海鷗は、母松野氏を喪った。彼の悲嘆ぶりは、「阿母の訃音至る、涙中に此を賦し、郷族の諸子に寄示す」(遺稿)に窺うことができる。

憶昨春晚出家園

憶ふ昨 春晚 家園を出でしとき

阿母把酒強開顏

阿母 酒を把りて 強いて顔を開きしを

臨別告兒無他語

別れに臨んで 兒に告ぐるに 他の語無し

行矣勉哉成業難

行け 勉めよや 業を成すこと難しと

爾後雖然隔雲山

爾後 然く雲山を隔つと雖も

髣髴其言耳如聞

髣髴として 其の言 耳に聞くが如し

因思文章滿腹充婦遺

因りて思ふ 文章 腹に滿たして 婦遺に充て

他日機下承忻歛

他日 機下 忻歛を承けんと

又思他日婦閭縱令貧

又た思ふ 他日 閭に帰り 縱令貧しくとも

勉辦甘旨侑盤殮

勉めて甘旨を辦じて 盤殮に侑め

兄笑弟嬉繞膝下

兄は笑ひ 弟は嬉み 膝下を繞り

彩衣長樂萊氏春

彩衣もて長く萊氏の春を楽しませんと

那料今夕鄉信伝

那ぞ料らん 今夕 郷信伝はり

封上二字欠平安

封上の二字 平安を欠かんとは

遽拆疾読家兄筆

遽かに拆き 疾く読む 家兄の筆

本月五日母棺闔

本月 五日 母棺を闔つと

一見疑夢再見真

一たび見て 夢かと疑ひ 再び見れば真なり

彷徨失措殆断魂

彷徨して 措を失ひ 殆ど魂を断つ

嗟呼喪父喪祖又喪母

嗟呼 父を喪ひ 祖を喪ひ 又た母を喪ふ

去年今年何厄年

去年 今年 何ぞ厄年なる

痛恨不覚血淚潛

痛恨して 覚えず 血淚潛たるを

回顧乾坤唯我存

回顧すれば 乾坤 唯だ我のみ存す

地下若有道途通

地下 若し 道途の通ずる有れば

縱冒白刃陪行轅

縱ひ白刃を冒すとも 行轅に陪さん

慨之悔之奈何天

之を慨き 之を悔ゆとも 天を奈何せん

退思不如追孝益勉焉

退きて思ふに 追孝益す焉を勉むるに如かず

男子立身豈無術

男子 身を立つるに 豈術無からんや

丹心誓報父母恩

丹心 誓って父母の恩に報いん

夜半耿耿不成眠

夜半 耿耿として眠を成さず

仰望家國俯黃泉

仰ぎては家國を望み 俯きては黃泉

噫嘻逝矣阿母不可見

噫嘻 逝けり 阿母見ゆべからず

栖鳥一声月色酸

栖鳥 一声 月色酸たり

想い起せば昨春おそくに家を出発する時、

おっ母さんは無理やり笑顔を作って、酒を勧めた。

別れに際しては、私に告げるに、ほかの事は一切言わず、

「行ってらっしゃい。勉強しなさいよ。学業成就是難しいですから」とだけおっしゃった。

その後は、遠く幾重もの山を隔てているけれど、

その言葉はありありと、耳に聞くように覚えてる。

そこで思うに、学問を郝隆（『蒙求』上「郝隆曬書」）のように腹いっぱい詰める事で、お土産に当て、

後日、機（はた）を織るおっ母さんの元で喜んでもらおうと。

また思うには、後日、村に帰ったなら、たとい貧しかろうと、

せいせいおいしい物を用意して、食膳に進め、

老萊氏（『二十四孝』）が五色の衣を着て老親を楽しませたように、いつまでも一緒に春を楽しもうと。

思いきや、今夕、郷里から便りが来て、

封書には「平安」という二字が欠けていようとは。

あわてて封を開き、急いで読んでみると、兄上の手で、

今月五日に、母が亡くなり、お棺に納められた、とある。

最初に読んだ時には夢ではないかと疑い、二度目に読んで、本当の事だと知った。

うろろうと、どうして良いか分らず、ほとんど意識が無くなろうとした。

ああ、去年の二月には父が亡くなり、また七月には祖母が亡くなり、今また母が亡くなった。

去年と今年とは、何と厄年である事か。

嘆き悲しむ餘り、思わず血涙が流れ出た。

かえり見て思うに、私は天地の間にただ独りで生きる事となった。

もしも冥土に通ずる道があるならば、

たとい獄卒の白刃をおかしてでも、あの世に行く車に付き添いたいものだ。

嘆いたり後悔したりするが、天命をいかんともする事ができぬ。

考え直してみるに、死後の孝を務めるに越した事はない。

男子として身を立てるに手だてが無い事があるろうか。

真心でもって必ずや父母の恩に報いよう。

真夜中、眼がさえて、眠る事ができず、

頭をあげては故郷の方を見やり、うつむいては冥土を思う。

ああ、おっ母さんは、亡くなってしまい、会う事ができぬ。

侘びしい月光のもと、寝ぐらの鳥が一声鳴いた。

海鷗は、「本月五日」と言うが、その本月とは、次に掲げる鉄心の慰藉の詩が「至日」(冬至、旧暦の十一月中)の詩と「歳晚」の詩との間に配せられている事に拠り、十二月五日のこと、と考える。また、海鷗詩の第十九句には、「去年の二月に父没す」「去年の七月に祖母没す」と自注があるが、毅齋の詩は第七節に述べたように安政四年二月十三日の事であった。右詩で注目すべき事は、悲嘆にくれていた海鷗が、第二十五句以下、失意のどん底から自分自身を引き

上げるべく、「立身」する事で「追孝」とすると考え直している点であり、そこに知識人らしい自助の姿勢を見出す事ができるのである。

海鷗の悲嘆を慰藉するために鉄心が古詩を詠じた事は、第七節に述べ、その前半部を引いたが、ここにその続く部分を引いておこう。

一朝負笈来大都

経義殆究傍及史

郷信忽伝阿母逝

愕然胆碎夢相似

口絶穀兮目忘閉

三日撫枕哭不已

哭餘作詩節益振

丹心一句殊堪美

君不見翁之金言母之慈淚

嗟汝勉哉夜繼晷

泉下幽魂依然在

所期汝之功業耳

一朝 笈を負ひて 大都に來り

経義 殆ど究め 傍ら史に及ぶ

郷信 忽ち伝ふ 阿母の逝くを

愕然として 胆碎け 夢に相似たり

口は穀を絶ち 目は閉づるを忘れ

三日 枕を撫して 哭して已まず

哭餘 詩を作り 節益す振ふ

丹心の一句 殊に美とするに堪ゆ

君見ずや 翁の金言 母の慈淚を

嗟あゝ汝 勉めよや 夜を晷ひかげに繼げ

泉下に 幽魂 依然として在り

期する所は 汝の功業のみ

ある日、笈を背負って江戸に遊学し、

経書はほとんど究めて、さらに史書にまで及んだ。

突如、郷里からお母さんの死亡を知らせて来て、

胆が砕けるほどに驚き、夢ではないかと疑った。

食う事もできなくなり、眠る事もできず、

三日の間、枕に伏しては、泣き続けた。

泣きやむと詩を作って、気節がますます盛んなる事を表わしたが、

中でも「丹心誓報父母恩」という一句は、特に褒めるべきだ。

君よ見ている事だろう、父君の金言と慈母の送別の涙とを。

ああ、君よ、夜を日に継いで勉強したまえ。

冥土には母君の魂は相変らずいまして、

ただ君が功績を立てるのを期待なさっているのだから。

鉄心は、海鷗の発憤を良しとしたのである。

この年十一月、中小姓に進み、江戸に遊学した野村藤陰も、海鷗の悲歎を目撃して、「菱田海鷗の母を喪ふを慰む」
〔慰菱田海鷗喪母〕『藤陰遺稿』二〕を作った。それは、鉄心が十二月十三日に催した歳晩の宴で賦した詩の後に配されて
いるから、やはり海鷗の母の死は、十二月五日の事として良いであろう。

怪君双眼淚痕横　　怪む君が双眼　　涙痕横たはるを

入耳凶音吾亦驚　　耳に入る　　凶音　　吾も亦た驚く

遠逐良師辞故国　　遠く良師を逐ひ　　故国を辞す

豈図聖善掩佳城　　豈図らんや　　聖善　　佳城を掩はんとは

客遊莫憾虧供養　　客遊　　憾む莫かれ　　供養を虧くを

孝道由来在立名　　孝道　　由来　　名を立つるに在り

努力従今繼遺緒　　努力して　　今より　　遺緒を継ぎ

九原不負断機情　　九原　　断機の情に負かざれ

君の両目に涙がにじんでいるのを見て、いぶかしんでいると、
悪い知らせが耳に入って、私も驚いた。

君は、故郷を離れて、遠く江戸まで良師を求めて来たが、

思いきや、御立派な母上が墓に入られたとは。

異郷に在って墓参りができない事を歎きなさるな、

孝行とは元もと、名を揚げて親を表わす事なのだ。

今後は努力して父から遺された事業を継ぎ、

機を断って子を戒めた孟母にも等しい亡き母上の、慈愛の情に負かないでくれたまえ。



野村藤陰肖像
『藤陰遺稿』上巻より

藤陰もまた、学業を成就する事こそが孝なのだ、と励ます。藤陰は、十八歳で藩学の助教に補せられ、ついで斎藤拙堂に学び、やがて侍講に進み、督学となった。明治元年には大垣藩権小参事となり、五年八月には大蔵省に出仕した。明治三十二年三月十五日に没す。享年七十三。詩を善くした事は、以下の記述がおのずから明らかにするであろう。

十五 歳暮の飲会

安政五年十二月十三日、小原鉄心は、藩邸において歳晩の宴を催した。会する者は、高島秋帆(六十一歳)・大槻磐溪(五十八歳)・保田嶺南(川越藩儒者。五十四歳)・佐竹永海(彦根藩画員。五十六歳)・岡本秋暉(小田原藩画員。四十九歳)・春木南華(南溟男。画家。四十歳)・西島秋航(書画篆刻家)・齋藤東洋(書画家。二十九歳)・鷺津毅堂(上総久留里藩儒。三十四歳)・小橋橘陰(儒家。三十五歳)・僧南園(釈密乗。六十三歳)、および大垣藩の上田高痴・野村藤陰(三十二歳)と海鷗である。鉄心の詩題は、「歳晩、邸舎小集、諸彦の至るを喜びて此を賦す」(歳晩、邸舎小集、喜諸彦至、賦此)〔遺稿』三)〕であり、題注に右の参加者を挙げる。そして、前引の海鷗を慰める詩の直後に置かれている。藤陰には、「十二月十三日、鉄心大夫の邸舎歳晩の宴に陪す。大夫に詩有り、席に即きて其の韻に攀し、諸彦と同じに賦す。此の日会する者、……」〔藤陰遺稿』一)〕詩があり、参加者の所には鉄心詩と同じ者を同一の順番で挙げてゐる。よって、この日が十二月十三日であった事が判明するのである。そして、『藤陰遺稿』では、この詩が前

引の海鷗を慰める詩の直前に配されている。小原鉄心が至日に宴を開催する例であった事は、前引の海鷗母の追悼詩の直前の詩題に、「余、例として至日を以て諸同人を邸舎に集む」と言う通りである。参加者に書画家が多い理由は、次の鉄心詩を読むと明かになるであろう。

乾坤何物在

乾坤 何物か 在る

寥廓人傑存

寥廓として 人傑存す

人間何事楽

人間 じにか 何事か 楽しき

団欒緑一樽

団欒 緑一樽

維時窮陰雪方霽

維れ時は 窮陰 雪方に霽れ は

拔夫人傑集小筵

夫の人傑を 抜きて 小筵に 集む

天半岳色来杯面

天半の 岳色 杯面に 来り

酒緑雪白相映妍

酒緑に 雪白く 相映じて 妍なり

此会譎笑渾無用

此の会 譎笑 渾て用無し すべ

不許俗士来脅肩

許さず 俗士の 来りて 肩を脅かすを そびや

磊磊落落丈夫胆

磊磊 落落たり 丈夫の胆

論及天下傍無人

論は天下に 及びて 傍らに 人無し

君不見醜虜入都初

君見ずや 醜虜 都に入る 初め

十丈慧星燦燭天

十丈の 慧星 燦として 天を燭すを てら

掲来都門暴疫熾 掲来 都門 暴疫熾んなり

百万生靈空灰塵 百万の生靈 空しく灰塵

嗟吁我輩又何幸 嗟吁 我が輩 又た何ぞ幸なる

聚首生同今日歡 聚首 生きて今日の歡を同じうす

沿例航船從隗始 例に沿りて 航船 隗より始めん

満堂笑語忽生春 満堂の笑語 忽ち春を生ず

天地には、いかなる物が存在するののか、

容量が大きいので傑物が存在するのだ。

この世の中で何が楽しい事か、

一緒に仲睦まじく一樽の緑酒を飲む事だ。

時期はまさに歳末、雪がちようど晴れて、

その傑物を選び出して、ささやかなる宴席に集めた。

空高く聳える富士が間近に杯の面に映り、

酒の緑と雪の白さとが映えあって美しい。

この宴会には、へつらい笑いは一切いらず、

俗物が闖入して、肩をそびやかして威張る事は許さない。

傑物たちは、気持ちさがさっぱりとして瑣事にこだわらず、

議論は天下の大事に及んで、ただ我のみを尊しとする。

君は見えていないか、毛唐が江戸に入って来た当初、

尾が十丈もある慧星が明るく空に輝いたのを。

それからは江戸にはコレラがはやり、

大勢の民衆が亡くなって灰となった。

ああ、我々は、また何と幸運なのか、

今日、生き長らえて顔を揃え、ともに楽しんでおる。

例によって大杯は、郭隗（私）から飲み始めよう。

やがて部屋中に笑声が起り、春の和気が早くも生じる。

書画家を多く招いた理由は、第九・十句に語られているよう。即ち、書画家は殆ど藩政に関する事がないので、話題が生臭い藩政や権謀術数などに及ばない。そこで、普断、家老として俗事に忙殺されている鉄心としては、もっぱら政治は忘れて、彼らとともに風流な世界に遊びたいのである。とはいえ、紅毛の夷狄が江戸に入ってよりこのかた、慧星の出現（安政五年七月）、安政五年六月のコレラ流行と災厄続きで、攘夷論が交わされるのは、已むを得ない成り行きである。

書画家を多く招いた理由を、初め、私は右のように考えたのであったが、その後、次のような考え方を補っておく。鉄心が書画会を開く様は、後述するように、『在臆話記』万延元年二年の条にも詳述されているが、それは酒杯を銜みながら行なわれた。当時の文人は、酒宴のさなかに筆を揮ったのである。そうとすれば、この時の酒宴にも各自が揮毫する事は十分にあり得る。況んやまして、文人と書画家が揃えば、画家の描いた絵に文人が詩文を書きつけて、立ちど

ころに立派な書画幅ができあがる。そしてそれは豊かな潤筆料を生み出す。このように酒宴が書画会を兼ねているので、画家を多く招いたのではなからうか。

ついでに藤陰の詩も挙げておこう。その詩も当日の状況を想像するのに参考になるからである。

丈夫襟度元磊落

丈夫の襟度 元と磊落

慷慨之中雅致存

慷慨の中に 雅致存す

愛客生平忘其勢

客を愛して 生平 其の勢を忘れ

欸待每置北海樽

欸待 毎に置く 北海の樽

維時歲晚忽劇際

維れ時に 歳晚 忽劇の際

擺遣塵務開雅筵

塵務を擺遣して 雅筵を開く

天公風流命滕六

天公 風流 滕六に命じ

巧粧寒林欺春妍

巧みに寒林を粧ひて 春妍を欺く

天半芙蓉来入座

天半の芙蓉 来りて座に入り

恰与吟侶对聳肩

恰かも吟侶と 対して肩を聳かす

大夫例喚舳船至

大夫 例として舳船を喚びて至らしめ

曰自隗始豈讓入

曰く隗より始めよ 豈人に譲らんやと

君不見就熱趨勢俗士態

君見すや 熱に就き 勢に趨るは 俗士の態

彼哉何為不愧天

彼や 何すれぞ 天に愧ぢざる

又不見物換星移幻世界 又見すや 物換り星移る 幻世界

英雄亦化道途塵 英雄も亦た 道途の塵に化す

嗚呼乾坤至楽杯中物 嗚呼 乾坤の至楽は 杯中の物

痛飲是師須尽歎 痛飲は 是れ師 須らく歎を尽すべし

醉来忘形相爾汝 醉ひ来りて 形を忘れ 相爾汝すれば

一団楽意喚回春 一団の楽意 春を喚回す

家老鉄心殿の度量は大きくて、物にこだわらず、

世を憂い、なげかれながらも、風流でいらっしゃる。

普段は、お客を愛して、権勢を振う事など無く、

北海太守孔融のように、客を歓待するために、常に酒樽を用意しておられる。

時はまさに歳末のあわただしい折、

俗事を投げやって、風流な宴を開かれる。

天帝も御風流で、雪の神滕六に命じて、

たくみに寒い林に綿帽子をかぶせて、春の梅林のように見せかける。

座席には空にそびえる富士山の姿が飛び込んで来て、

まるで詩を作っている人々と昂然と向いあっているようだ。

鉄心殿は例によって大杯を持って来させ、

「郭隗のように言い出した自分から飲み始めなければならぬ、どうして人に最初に飲ませられようか」とおっしゃる。あなたは見ていないか、栄え勢いある者に就くのが俗物の習い、という様を。

そのような奴は、どうして天に対して恥じないのか。

また見ていないか、時がたてば物皆変わるのが、この世のありさまである事を。

英雄さえも死ねば道路の土くれと成りはてるのだ。

ああ、この世の最高の快楽は杯中の酒であって、

徹底的に飲める者こそ師とするに足るのだから、大いに楽しむべきである。

酔って、互いの地位など忘れて、俺、お前と呼びあえば、

一同が楽しむうちに、新春がめぐって来る。

鉄心と藤陰の詩に共通するものは、世俗の憂さと身分差とを忘れて、一緒に酒中趣に没入しようという、道学臭の放擲である。藤陰は、「鉄心、性豪邁、海内の豪傑と交るを喜び、往々にして談論風発、声氣相加はる。既にして笑語歌管大いに起る。惟だ君のみ其の間に処りて、斂然として静黙、容は愈よ恭にして、氣は愈よ和す。之に近づく者は覚えずして自ら斂む。鉄心、之を見て益す敬す」(小野湖山撰「藤陰野村君墓碣銘」『藤陰遺稿』三)と、鉄心よりも餘程、儒者先生的な方正さがあった人らしいが、その藤陰にして、かような快樂追求の詩を作る点に、この日の一座の遊興横逸した気分が想像できるのである。なお僧南園の『南園詩稿』(孫清石理外輯。明治八年、浅田惟常序)にも「戊午臘日、鉄心小原大夫招集、主人の韻に次す」があり、「天氣幸いに雪霽の妍に逢ふ」という句があるから、その日は雪が晴れた日であった事が知られる。

その数日後の十二月某日も雪が降ったが、夜になって、鉄心は、海鷗のほかに上田高痴・宮本翠迂・内藤謙斎を伴って、藤陰の宿舎を訪れた。鉄心には「雪夜、藤陰の官舎を訪れ、高痴・翠迂・謙斎・海鷗と同一賦す」〔鉄心遺稿〕三）があり、藤陰には「雪夜、鉄心大夫・高痴君、酒を携へて余が廨舎を訪はる。即席に筆を走らせて謝す」〔藤陰遺稿〕一）がある。

鉄心の詩は、次のようなものである。

風雪天涯歲欲殘

風雪 天涯 歲 殘せんとす

何凶同此故人歎

何ぞ凶らん 此の故人と同一歎せんとは

団欒一夜郷関話

団欒 一夜 郷関の話

灯影茶香情不寒

灯影 茶香 情 寒からず

故郷をはるか離れた江戸で、歳末が近づいた今夜は、風と雪が激しい。

思いきや、この友人たちと一緒に楽めようとは。

一晚中、親しく故郷の話を交わしあっていると、

灯は揺れ、茶は芳香を放って、暖かい友情が満ちわたる。

藤陰の作も挙げておこう。

如斯奇夜与何人 斯くの如き奇夜 何人と与にせん

忽喜夫君携酒臻 忽ち喜ぶ 夫の君 酒を携へて臻るを

自笑客居乏供給 自ら笑ふ 客居 供給に乏しく

団欒相对主為賓 団欒 相对して 主の賓と為るを

このように雪景色が綺麗な夜は、誰と過ごしたら良いものか。

思いがけなく喜ばしくも、鉄心殿が酒を携えていらっしやう。

恥ずかしい事には江戸勤番で、御馳走も出せず、

向いあって、主人の私が客のように、お酒を振舞って戴きます。

両者の詩を読み併せると、この日の宴はささやかで質素なもので、先日のように賑やかなものではなかった事が窺われる。

安政五年の除日、即ち十二月三十日、昼間には、部下の隊長である小野崎立堂・酒井・永田の三士とともに馬を馳せて、蒲田の梅園に遊んだ鉄心は、夜には、医師宮本翠迂の月白風清楼に、海鷗のほかには上田高痴・野村藤陰・内藤謙斎とともに訪れ、除夜の鐘を聞きつつ、夜を明かした。鉄心には、「除夜、翠迂国手宅に高痴・藤陰・謙斎・海鷗と同一歳を守る、分ちて来字を得たり」(『遺稿』三)があり、藤陰には、「除夕、月白風清楼に歳を守る。小原大夫・上田・内藤の二君及び海鷗と共に、高適の句を分ちて韻と為し、余は鬢字を得たり」(『遺稿』一)がある。翠迂とは、『藤陰

遺稿』一、万延元年の条に、「江戸の翠迂宮本医伯の贈らるるに酬ゆ」とあって、宮本翠迂という人物である事が判明する。宮本国手と言えば、大垣出身で、菱田毅齋に漢学を学んだ事もある蘭方医宮本元甫が想起される。だが、この頃は、元甫は高槻藩医員であり、年齢も七十歳近くであるのに対して、この宮本国手は次に引くように「医伯処子又英俊」と言われているから、定職もなく年齢も若い人物であると考えられ、元甫ではないようである。右の句を含む藤陰の詩を掲げておこう。

三百六十日

快意事僅僅

多在風塵裡

管管俗難遯

況此歲晚忽擾際

誰談風月闕筆陣

思量閑忙非閑境

此心平坦逆為順

大夫棟蓐粲相映

医伯処子又英俊

知己相逢笑把盃

寧傲世人啼窮又訴困

三百六十日

快意の事 僅僅たり

多くは風塵の裡に在りて

管管として 俗 遯れ難し

況んや 此の歳晚 忽擾の際に

誰か風月を談じて 筆陣を闕はさん

思量するに 閑忙は 境に関するに非ず

此の心 平坦ならば 逆も順と為らん

大夫と 棟蓐と 粲として相映じ

医伯は処子にして 又た英俊

知己 相逢ふて 笑って盃を把り

寧ぞ傲はん 世人 窮に啼き 又た困を訴ふるに

灯火熒熒眼俱青 灯火 熒熒として 眼俱に青く

瓶梅浮浮伝春信 瓶梅 浮浮として 春信を伝ふ

夜将闌処举盃頻 夜将に闌ならんとする処 盃を挙ぐるこまこと頻りに

只惜一年与燭燼 只だ惜む 一年 燭と燼きんことを

嗚呼少壯不樂老及之 嗚呼 少壯にして樂まざれば 老の之に及ばん

落花禪榻奈霜鬢 落花 禪榻 霜鬢を奈いかせん

一年三百六十日、

心楽しい事は僅かだ。

大部分は煩わしい世間の中で、

俗事を逃れられずに、せつせと働いている。

況んやまして、この歳末のあわただしい折に、

誰が風流を語りあい、詩文を競いあったりしようか。

考えるに、忙しいか暇かは、境遇に拠るのではない。

この心が安らかでありさえすれば、逆境も順境になるのだ。

鉄心殿は、庭梅と向いあつて輝いておられ、

宮本医師は官に仕えず、その上に俊才でいらっしやる。

知己たちが集つて、楽しく酒を酌みかわし、

どうして世の人が困窮を歎いたり訴えたりするのに倣おうか。

灯はきら／＼と輝いて、見つめあう目はいずれも暖かく、

瓶に挿んだ梅は、ほのかに香って、春の到来を告げている。

夜も闌になろうとして、杯を頻繁にほすようになり、

ひたすらこの一年が灯火とともに尽きようとしている事を残念に思う。

ああ、若い時に楽しまなければ、老いがすぐにやって来て、

禅榻に坐って落花を眺めつつ、鬢が白くなつたのを歎いても致し方がないようになるのだ。

かくて、鉄心・藤陰と海鷗たちは、藩務に由来するストレスと、洋夷の跳躍跋扈に基く憤懣とを、詩作と飲酒とによつて解消せんとしつつ、安政六年の新春を迎えるのである。この詩の快樂思想が『莊子』雜篇「盜跖」のそれに基いている事は、言うまでもなからう。

注

(1) 拙堂の関が原行が安政四年九月十五日の事である事は、直井文字氏「斎藤拙堂年譜稿」(「お茶の水女子大学 人文科学紀要」四十一、一九八八年)に記される。

(2) 藤陰に「戊午仲冬、余、班に中扈従に進み、兼ねて東行之命有り……」と題する七絶がある(「藤陰遺稿」一)。

(3) 『鉄心遺稿』三の安政五年の条に「除日、同小野崎酒井永田三士馳馬到蒲田梅園、酔後慨然賦此、三士者、皆余麾下隊長也」がある。

(とくだ・たけし 法学部教授)